

平成17年度国土施策創発調査

「地域プライド創発による地域づくりのあり方に関する調査」

～地域固有の歴史的・精神的・文化的価値を軸とした地域プライドの創発～

【要約版】

平成18年3月

文部科学省	生涯学習政策局
文化庁	文化 部
文化庁	文化 財 部

目 次

第1章	地域プライドと地域プライドによる地域づくりについて	
1-1	本調査における地域プライドの定義	1
1-2	歴史的地域プライドによる地域づくり	2
第2章	全国の歴史・文化を活かした地域づくりの現状に関する調査	
2-1	都道府県アンケート調査	3
2-2	歴史的地域プライドによる地域づくりの全国事例調査	8
2-3	歴史的地域プライドによる地域づくりの海外事例調査	11
第3章	モデル地域における歴史・文化を活かした地域づくりの現状に関する調査	
3-1	モデル地域調査の目的とモデル地域の設定	16
3-2	モデル地域ヒアリング調査結果	18
3-3	市民アンケート調査	22
3-4	モデル地域における歴史的地域プライドによる地域づくりの実態	25
第4章	歴史的地域プライドによる地域づくりの推進方策	
4-1	歴史的地域プライド事例分析	27
4-2	歴史的地域プライドによる地域づくりの視点整理	33
4-3	歴史的地域プライドによる地域づくりの推進方策	35

第1章 地域プライドと地域プライドによる地域づくりについて

1-1 本調査における地域プライドの定義

(1) 地域プライドとは

人に個性があり、プライドがあるように、地域にも個性があり、プライドがある。しかし、これまでのインフラ整備や産業振興等といった、いわば成果が見える地域づくりが中心に進められてきた時代において、これら地域が本来持っていたはずのプライドが消滅しつつある。

一方で、その中でも地域のプライドを守り、育てている地域が存在する。地域プライドを守り、育てていくことは、地域づくりの大きなエネルギーとなり、個性ある人づくり、地域づくりにつながっているといえる。

(2) 本調査での地域プライドとは

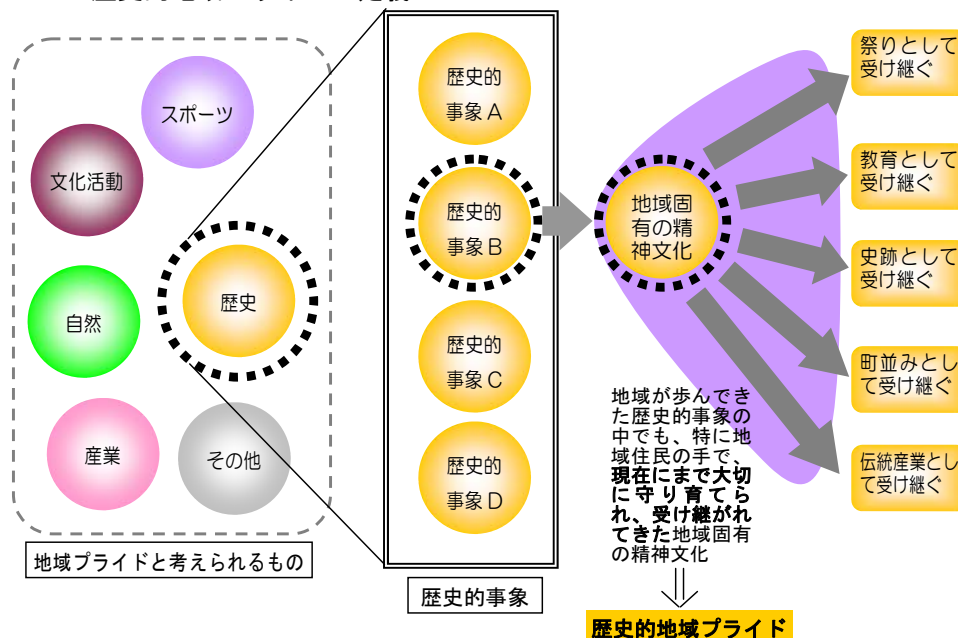
サッカーや野球、音楽や劇などといったスポーツ文化活動を起こし、人々がこれらを誇り（プライド）に思い、これを地域づくり、地域振興につなげている地域が多く見られる。また、地域を形づくる山や川、水などの自然そのものを敬い、これを誇り（プライド）として地域づくり、地域振興につなげている地域も多く見られる。

一方で、各々の地域では、有史以来、経験し、蓄積してきた多くの歴史的事象が存在する。その中でも、地域の人々により、時には労力を出し、資金を出し、精神を発揮して、これら歴史的事象を、祭りをはじめ、民俗芸能、遺構、伝承、あるいは町並みなどとして、大切に守り育て、受け継いできているものがある。

このように数ある地域の歴史的事象の中で、地域の人々によって受け継ぎ、守り育てられてきた「地域固有の精神文化」こそ「地域プライド」である。

本調査では、様々な地域プライドのうち、（主に明治期以前から）長い年月を経て、守り受け継がれてきている「地域固有の精神文化」に着目し、これを「歴史的地域プライド」と定義する。

図 1-1-1：歴史的地域プライドの定義



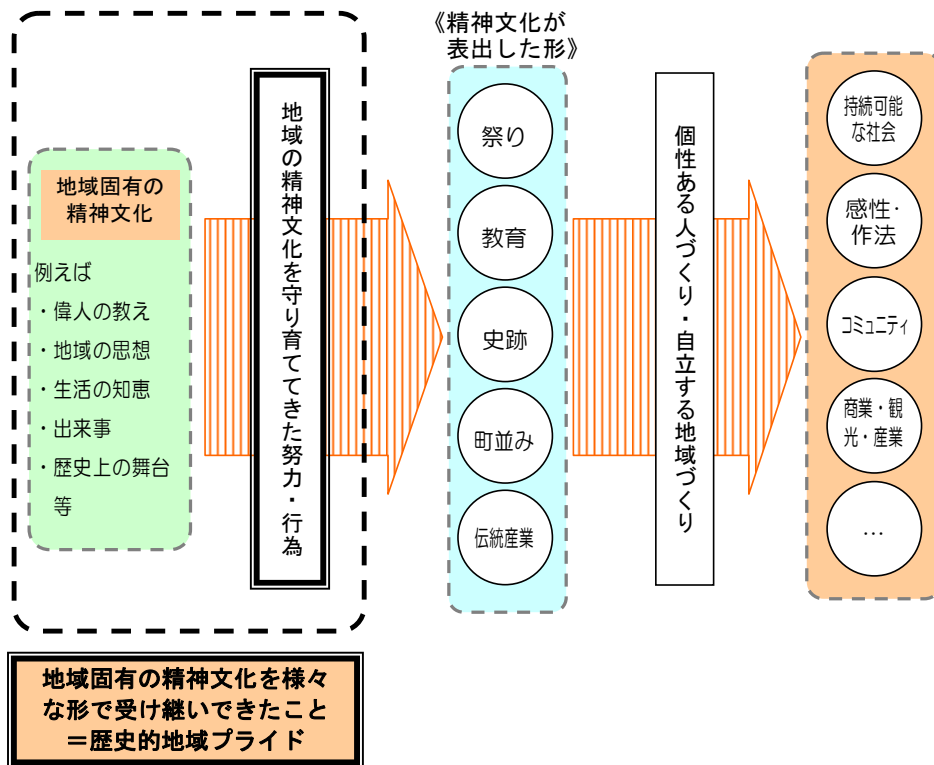
1-2 歴史的地域プライドによる地域づくり

(1) 歴史的地域プライドによる地域づくりの意義

これら歴史・祭り・文化資源等が現在にまで残り、受け継がれているのには理由があり、受け継ぎ、守り育てるために様々な努力（取り組み）がなされている。

このように「歴史的地域プライド」が地域住民の中で共有できている地域においては、時代が変わり、社会システムが変貌しようとも、今後とも個性ある人づくり、地域づくりが継続できるものであると考えられる。更には、地域プライドを持った人々により地域づくりが行われていくことは、これからの持続可能な社会の形成、豊かな人の感性や作法を生み出すばかりではなく、地域コミュニティの再生・活性化、観光や新産業といった地域振興にも大きく寄与できるものである。

図 1-2-1：歴史的地域プライドによる地域づくりの意義



第2章 全国の歴史・文化を活かした地域づくりの現状に関する調査

2-1 都道府県アンケート調査

(1) アンケート調査実施概要

- ・ 全国 47 都道府県における「文化振興」、「生涯学習」、「文化財」、「地域振興」、「NPO」、「観光」を担当する6つの部署に郵送によりアンケートを配布、インターネットメール及びFAXによる回収。
- ・ 配布数 289 件のうち、180 件から回答（回収率：62.3%）

(2) 歴史的地域プライドの抽出

- ・ 全国都道府県から寄せられた地域の誇りとして考えられる歴史的な資源を、以下の8つのテーマに分類すると、最も多かったのが「⑤伝統芸能・祭り」であり、全体の約30.6%を占めている。次いで「④町並み・史跡」であり、全体の約27.4%を占める。
- ・ これら上位2つは、文化財保護法でいわれる『文化財』として定義されているものであり、地域の誇りとして挙げることができる代表的なテーマとなっている。その他、「⑧産業・伝統工芸」についてもこの部類に入ると考えられる。
- ・ これらの次に多いのは、「①先人・教え」であり、地域が輩出した偉人や地域ゆかりの人が地域の誇りとして数多く位置づけられている。

①先人・教え

- ・ 地域ゆかりの偉人の業績や教えを地域の誇りとしている。
- ・ 歴史上の人物のゆかりの地であることを地域の誇りとしている。
- ・ 地域ゆかりの組織（例えば水軍や地域の歴史文化を継承する技術者など）を地域の誇りとしている。
- ・ 歴史上の人物個人ではなく、これら人物を多数輩出してきた地であることを地域の誇りとしている。

②出来事・発祥

- ・ 歴史のターニングポイントとなるような出来事（戦争など）が起こった地であること、またはその出来事に由来する史跡等が存在することを地域の誇りとしている。
- ・ 文化的な事項（音楽など）の発祥の地であることを地域の誇りとしている。

③拠点・要衝

- ・ 各時代における地域の中心・拠点として繁栄した地であったことを地域の誇りとしている。
- ・ 交通や物流の要衝として繁栄した地であったことを地域の誇りとしている。

④町並み・史跡

- ・ 歴史的な建造物や構造物、町並みが残っている、またはこれら資源を守り受け継

いでいることを地域の誇りとしている。

- ・歴史上価値の高い史跡を有している、またはこれら史跡を多く有していることを地域の誇りとしている。

⑤伝統芸能・祭り

- ・風俗慣習や祭礼行事、民俗芸能を現代まで継承していることを地域の誇りとしている。

⑥神話・伝説

- ・日本創生の神話や諸伝説にかかわる地であること、またはその神話・伝説に係わる史跡等が存在することを地域の誇りとしている。

⑦独自文化

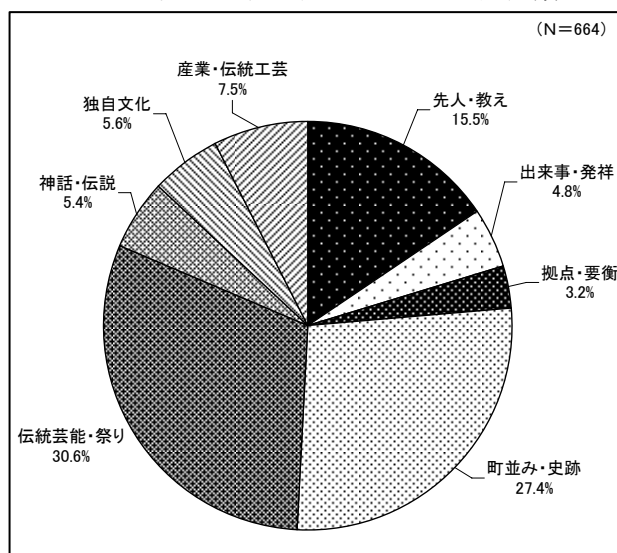
- ・地域独自の生活文化を現在まで受け継いでいることを地域の誇りとしている。
- ・地域の長い間受け継がれてきた教え（例えば、江戸時代の藩校の教え）を現在まで受け継いでいることを地域の誇りとしている。
- ・歌（和歌や俳句、連歌など）が多数読まれた地であることや、これら文化に関連の深い地であることを地域の誇りとしている。

⑧産業・伝統工芸

- ・日本を代表する産業や伝統工芸が興った地であることを地域の誇りとしている。
- ・近代産業の中心地であることを地域の誇りとしている。

※全国アンケート調査では、その他、「自然」「食文化」「天然記念物」などに関する誇りも挙げられたが、これら事項については、以下の集計・分析の対象外とする。

図 2-1-1：歴史的地域プライドのテーマ別分類



(3) 地域の誇りとして考えられる理由

- ・ (2) に挙げられた歴史的地域プライドが地域の誇りとなっている理由として、「地域の住民が熟知していること」が最も多く、約 41.5% を占めている。これは、8 つのどのテーマをみても最も多く、『地域住民が知っている』ことが、誇りと考えられる一因であるといえる。
- ・ 次いで、「地域住民の心の支えとなっている。または生活の一部となっている」が約 23.9% と高くなっており、「神話・伝説」を除く全てのテーマで「地域の住民が熟知していること」に次いで高くなっている。特に有形、無形文化財などの“形態”として日常触れることができるテーマについては、これを誇りとする理由として挙げる傾向が高い。
- ・ 一方で、「伝統芸能」、「神話・伝説」、「独自文化」及び「拠点・要衝」といった文化財などの形としてだけでなく、“伝承による言い伝え”などを主たる継承の形とするテーマについては、「地域独自の考え方・信念が息づいている」ことを誇りとなっている理由として挙げる傾向が高くなっている。

(4) 歴史的地域プライドを活かした地域づくりに向けた取り組み

【取り組み内容について】

- ・ 「歴史的地域プライド」を活かした地域づくりへの取り組みとしては、「祭りやイベント」として取り組んでいる事例が最も多く、全体の約 24.4% を占めている。次いで、「施設整備」、「パンフレット等の作成」に取り組んでいる事例が多い。
- ・ 次いで、「文化資源等の保護」、「公開講座、市民講座」、「地域教育」と続き、歴史的な資源のそのものを継承したり、保護したりする取り組みに加え、「広報」、「学習」、「教育」といったソフト的な取り組みも比較的多く実施されている。
- ・ 歴史的地域プライドのテーマ別に見ると、「先人・教え」についての取り組みとして、顕彰活動（偉人に関連する団体や市町村が参加し、交流を図るサミット）や誕生祭などの「祭りやイベント」が比較的多く実施されているとともに、顕彰記念館など、先人ゆかりの遺品等を保存展示する施設整備も比較的多く実施されている。
- ・ また、「拠点・要衝」や「町並み・史跡」では「町並み・回遊ルートの整備」に取り組む事例が多く、「独自文化」では「公開講座、市民講座」、「伝統芸能・祭り」及び「神話・伝説」では「地域教育（地域の中における通過儀礼や民族行事、礼、語り部等を通じて、地域の年長者から年少者へ伝えられること）」に取り組む事例が他のテーマに比べて多く実施されている。

【取り組み主体について】

- ・ これら取り組み内容について、取り組み主体を見ると、行政機関が取り組み主体となっている活動が全体の約 45% を占める。次いで、「町会、自治会、地域住民」が約 15.6%、「NPO や市民活動団体などの非営利団体」が約 12.0% となっており、取り組みの主体が行政機関であるものと、地域住民やNPO等の市民団体である場合とに大きく二分される。

- ・ テーマ別に見ると、ほとんどのテーマで、行政機関が取り組み主体となっているケースが多い。特に、「市町村」による取り組み事例が最も多く、「伝統芸能・祭り」を除く全てのテーマで3割を超える取り組みを行っており、その中でも「拠点・要衝」、「産業・伝統工芸」、「先人・教え」に対する取り組み事例が多くなっている。
- ・ 「伝統芸能・祭り」、「町並み・史跡」については「町会、自治会、地域住民」が、「独自文化」については「NPOや市民活動団体などの非営利団体」が主体となって取り組んでいる事例が多い。

(5) 地域の誇りとして考えられる歴史的な資源を伝えるコンテンツ

- ・ 「歴史的地域プライド」を地域住民等に伝えるために、これまで“伝承”という形が中心であったが、現在は、より幅広く、より分かりやすく伝えるため、様々なコンテンツが作成され、公開されている。
- ・ コンテンツとして最も多いのが、「書籍」であり、学校教材における副読本や行政機関のホームページなどとして公開されている。次いで、「調査研究」が多く、「拠点・要衝」や「町並み・史跡」のテーマは、史跡等そのものに対する調査研究報告書として公開されている。
- ・ その他、「伝統・祭り」については、踊りや祭りそのものがコンテンツであり、これを実演することはもちろんのこと、記録としてビデオやCD、DVDなどの映像記録や音声記録として残すことが行われている。また、「先人・教え」については、「文学」や「映画・アニメなどの映像」などが創作されているほか、イメージソングをつくるなど、「音楽」として伝える取り組みも比較的多く実施されている。
- ・ 全体的には数は多くないものの、「先人・教え」、「拠点・要衝」、「神話・伝説」及び「出来事・発祥」において、ミュージカルやオペラなどの創作の材料となっている事例も見られる。

(6) 地域の誇りとして考えられる歴史的な資源を活かした地域づくりへの行政支援の実態

- ・ 都道府県において、地域の誇りとして考えられる「歴史的地域プライド」を活かした地域づくりに対する支援を行っている部署は、全体の約半数である。部署別にみると、「文化財保護・活用」部署での支援割合が最も高く、約77.8%が何らかの行政支援を行っている。次いで、「観光」、「文化振興」、「地域振興」の部署の支援割合が高く、約半数となっている。
- ・ なお、「生涯学習」及び「NPO」の部署では、「歴史的地域プライド」に限定したような取り組みではなく、これらを含めた幅広い取り組みに対する支援を行っていることから、支援割合は他の部署に比べて、低くなっている。

(7) 地域の誇りとして考えられる歴史的な資源に関する教育・学習活動

- ・ 地域の誇りとして考えられる歴史的な資源を地域の人々に伝え、受け継いでいくための教育・学習活動の実態をみると、取り組み主体では「都道府県」や「市町村」とい

った行政機関が最も多く、両者で約半数を占める。次いで「非営利団体」、「教育機関」となっている。

- ・ 教育・学習活動の対象者として、「地域住民（地域の児童・学生を除く）」が最も多く、約半数を占める。次いで、「地域の児童・学生」を対象としたものが多い。
- ・ 取り組み方法では、「研修会、講座形式（シンポジウム等含む）」が最も多く、約半数を占める。次いで、「ワークショップ形式」が多くなっている。

(8) 「地域の誇り」を活かした地域づくりの課題

- ・ 担当部署別に課題を整理する。

担当部署	課題
文化振興	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域住民の理解と気運づくりが重要。そのための情報提供や周知機会の確保や支援が必要。 ・ 財源の確保。
NPO	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域住民（NPOやボランティア含む）の自主的な活動。 ・ 地域住民（NPOやボランティア含む）と行政との協働と役割分担。
生涯学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域住民が自らの地域の歴史・文化への理解を深めることが必要。そのためには学習機会・情報発信機会等を増やすことが重要。 ・ 人材育成や組織の継続の困難性。 ・ 財源の確保。
文化財	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化財に対する理解を得るのが困難…価値観の多様化、開発との整合。 ・ 後継者の不足、リーダーとなる人材の不足。 ・ 本物を地域に残すことの必要性。 ・ 財政上の課題…文化財保護。
観光	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観光客・行政・事業者・住民の価値観の違い。これら立場の異なるもの同士の連携の必要性。 ・ 人口減少、少子高齢化に伴う地域の資源を守り育てる環境の弱体化。 ・ 行政の枠組みの変化による独自の地域文化が喪失するおそれ。
地域振興	<ul style="list-style-type: none"> ・ リーダーや後継者の不足。 ・ 知る、触れる機会の減少。 ・ 地域の資源（遺産）に対する理解度。 ・ 他の地域資源との組み合わせによる地域振興や他部署との連携（観光分野など）。 ・ 価値観の差異。 ・ 財源の確保。

2-2 歴史的地域プライドによる地域づくりの全国事例調査

都道府県アンケート調査から寄せられた歴史的地域プライド及び文献やインターネットにおける情報から、全国で歴史的地域プライドによる地域づくりを実践している地域を抽出し、電話等でのヒアリング調査等を実施した。

(1) 岐阜県郡上市（旧八幡町）

【宝暦の義民・凌霜（りょうそう）の精神を受け継ぐ郡上踊りの継承】

- ・ 宝暦期の重税に対する大一揆で、幕府に命を賭けて上訴した義民を誇りとしている。また、維新時に新政府支配下でありながら会津支援のため「凌霜隊」を結成し、派遣している。
- ・ 宝暦の義民は郡上踊りとして受け継がれ、維新の義考は、凌霜の精神として語り継がれている。
- ・ 宝暦一揆の映画、児童向けの漫画「ふるさとをゆく」、劇団による上演、その他多くの社会教育のための本が作られている。
- ・ 凌霜は満州開拓団の精神的支柱となり、また合併新市の教育方針の根幹に、「凌霜の心」として取り上げられ、地域の人づくりに資している。

(2) 福島県会津若松市

【藩校日新館の教えによる会津人づくり】

- ・ 保科正之以降の会津若松の歴史について、小学校・中学校用に副読本を作成し、全校で使用している。
- ・ 日新館を再建し、小学校の校外学習に使ったり、4年生（10歳）の時に「1/2成人式」として、学童を集め、日新館の教えを勉強したりしている。
- ・ 会津出身の偉人を上演する市民団体や「会津偉人たち展」を常設展示、また多くの地域住民による社会教育活動も盛んである。
- ・ 市長自ら中学校に出向き会津の歴史を講和している。また、日新館の教えを「あいづっこ宣言」として策定し、家庭に配り、街角の各所に高札を立てるなど、日新館の教えによる会津人づくりを推進している。

(3) 滋賀県高島市（旧安曇川町）

【近江聖人中江藤樹の教え「致良知（ちりょうち）」によるまちづくり】

- ・ 江戸時代初期の安曇川出身の儒学者で、日本における陽明学の開祖。数多くの徳行・感化によって、没後も〈近江聖人〉として敬われ慕われている。
- ・ 「致良知（ちりょうち）」とは「人間は本来誰もが美しい心を備えている」ということを意味し、人や自分の善い面を引き出す生活をするための大切さ、この「致良知」を村の人々に説き続けた中江藤樹及び藤樹の教えを地域の誇りとして、現代にまで耐えることなく受け継がれてきている。

- ・ 小学校3～6年生を対象とした副読本があり、それ以下の児童向けに藤樹カルタや紙芝居を作成している。
- ・ 藤樹書院や中江藤樹記念館で、フォーラムやシンポジウム、生誕日に「立志祭」を行い、社会教育が盛んである。また、中江藤樹というビデオを作成し、社会教育にあてている。
- ・ 合併新市も「藤樹の教えによるまちづくり」を標榜している。

(4) 栃木県二宮町他

【二宮尊徳の報徳精神と報徳仕法による地域づくり】

- ・ 二宮尊徳については、貧乏ゆえに懸命に働き、親に孝行したという二宮金次郎像に見られる幼少期の姿が有名である。この二宮尊徳ゆかりの町としては、誕生地である神奈川県小田原市からその後移り住んだ栃木県二宮町に至るまで様々な市町村がある。
- ・ 二宮尊徳については、この幼少期の勤勉の姿よりも、江戸時代に「至誠」「勤勉」「分度」「推譲」という4つの精神（報徳精神といわれる）をもとに、財政再建や農村復興に大きな成果を挙げた取り組み（報徳仕法といわれる）によって現在の地域が成り立っていることを誇りにしている地域が多く存在する。
- ・ これら地域では、報徳仕法をまちづくりに活かすために、資料館やゆかりの史跡の整備・保存のみでなく、生涯学習やまちづくり講座における「報徳仕法」に対する学習機会の提供をはじめ、報徳に関する理解を深めるために、劇や太鼓、オペラの創作など、様々な取り組みを行っている。
- ・ また、二宮尊徳にゆかりの深い市町村が持ち回りで「報徳サミット」を開催している。本サミットでは、報徳の教えを通して地方分権社会における住民と行政とのあり方の研究や、各自治体における「今日まで報徳思想・司法を活かしてどのようなまちづくりを進めてきたのか」「尊徳の教えや仕法をこれらかのひとづくり・まちづくりにどう生かすか」ということを主題とする意見交換、広域的な地域間の連携・交流が行われている。

(5) 宮城県加美町

【「火伏せの虎舞」と防火啓発による地域づくり】

- ・ 加美町中新田地区（旧中新田町）は、西方部に高い山がない地形により、早春から初夏にかけて西北の強風が吹き荒れ、たびたび大火事を引き起こしてきた。
- ・ 中新田地区に伝わる伝統行事「火伏せの虎舞」の起源については、約650年前に中新田の城主斯波家兼公が住民を火難から守るため、「雲は龍に従い、風は虎に従う」の故事にならって火伏せを祈願する祭礼を行ったことが起源とされている。
- ・ また、後には領主がこの祭礼行事を経済対策として活用し、城下の繁栄策として火消組に山車と虎舞を練り歩かせることで、商売繁盛と風化火難防止の意識啓発を行った。
- ・ 明治35年に町は再度大火に見舞われ、城下473戸のうち6割が消失するという甚大な被害を受け、この大火によって祭礼道具のほとんどは焼失し、虎舞の行事も久しく中止されることとなったが、祭りに対する町民の思い入れは強く、昭和2年に復活した。
- ・ 火消組は戦時中においては警防団となり、現在では消防団と称されている。その後町村合

併により広域での消防組織の再編はあったが、中新田消防団独特の「火伏せの虎舞」は防火意識啓発のシンボルとなっており、明治 35 年の大火以来、大きな火事を出していないことは同消防団の誇りとなっている。

- ・ 現在では、毎年 4 月 29 日に商店街を会場として行われており、お囃子は地元消防団が、虎舞は男子中学生が担うなど、幅広い世代を巻き込んだ行事となっている。地元からはもちろんのこと、各地から多くの観光客が訪れ、町は大いに賑わいを見せる。
- ・ 各家庭を訪れる虎舞の虎に「頭をかぶづいて（かみついて）もらうと、頭が良くなる」との言い伝えがあり、小さな子供たちは怖くて泣きながらも虎の口に頭をくわえてもらう。そして、自分の親、兄弟、先輩たちの姿にあこがれを持って見ながら、小学校高学年になると虎舞が踊れることに胸をはずませ、練習に励む。このように、地域の子供たちは幼い頃から虎舞に親しみ、育っていく。
- ・ また、虎舞に親しむ機会は祭りのときだけにとどまらず、小中学校の授業に取り入れられたり、保育所や中学生の子供たちが虎の面作りをして各種行事の際に披露したりしている。

（6）鹿児島県南さつま市（旧加世田市）

【「いろは歌」による地域づくり】

- ・ 戦国武将島津忠良（日新公）は、すさんだ時代に人としての生き方を「いろは歌」として唱えた。以来 460 年間に渡り、地域住民に歌い継がれ、地域住民の確かな精神的支柱となっている。また、更に他地域への広めるために「薩摩琵琶」「妙音十二楽」を作り奨励し、いろは歌に基づく多くの琵琶歌がつくられた。
- ・ 教育委員会においても「いろは歌を活用した心の教育」を大方針とし、いろは歌カルタとり大会、歴史講座、講演会、いろは歌プロジェクト、妙音十二楽、薩摩琵琶弾奏会等広く社会教育活動を展開している。
- ・ 日新公を祭る竹田神社では N P O がいろは歌灯籠フェスタ、また、県民俗文化財に指定されている土（さむらい）踊り等を伝え、合併新市であっても平成 14 年をいろは歌元年とし、その精神による地域づくりを標榜している。

2-3 歴史的地域プライドによる地域づくりの海外事例調査

地域の歴史や文化を大切にし、その地域固有の精神を守り受け継いでいく取り組みについては、国内だけでなく、海外でも積極的に実践されている。

本節では、海外における歴史的な地域プライドによる地域づくりについて、文献やインターネットから情報を収集し、整理を行った。

(1) オーストリア共和国、ザルツブルグ

【モーツァルトの音楽や精神が市民の生活と密接に係わり合いをもつまち—先人・教え】

- ・ オーストリアの西部に位置するザルツブルグは、町の名前の由来が「塩の城」と称すように、紀元前 1000 年の昔から岩塩の交易で栄えてきた歴史的に由緒ある町である。古代ローマ時代の殖民都市として栄え、7世紀にはカトリックの大司教座がおかれ、カトリックの都としても栄えてきた。山頂にそびえたつホーエンザルツブルグ城をはじめ、美しい街並みの保存により、まちの旧市街地は 1996 年に世界文化遺産に登録された。
- ・ ザルツブルグというと、「モーツァルト誕生の町」、そして映画「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台として、音楽の町として有名であり、6月から9月まで行われる「ザルツブルグ音楽祭」をはじめ、オーストリア国立ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽大学などに世界中から多くの音楽家たちが集まってくる。
- ・ また、市民は、モーツァルトゆかりの地として、モーツァルトを称えるのみではなく、市民自らも音楽を嗜んでいる。モーツァルト自身が、世界中に多くの人々に愛されている人物であるが、市内には 12 団体もの吹奏楽団があり、彼らは市内だけでなく、国内、そして日本を始め海外での多数演奏公演を実施しており、地域交流、国際交流の一翼を担っている。また、町の至るところで、毎晩のようにモーツァルトの曲を中心にしたコンサートが行われるなど、市民の生活や文化とモーツァルトとは切り離して考えることができないものとなっている。
- ・ ザルツブルグは、モーツァルトと音楽という地域が誇りとするものが、現在においても、地域の人々の生活・文化と密接に関わっていることが地域プライドとなっているといえる。

(2) チェコ共和国、プラハ

【チェコ人のためのチェコ人による国民劇場を守るまち—出来事・発祥】

- ・ チェコはかつて、オーストリア帝国の支配下であり、チェコ人はオーストリア人（ドイツ民族）に支配されていた。その当時、プラハの全ての劇場ではドイツ語による上演が行われていたが、19 世紀になると各国で民族意識が高まり、チェコでもオーストリア人の支配に対するチェコ人の民族運動がはじまった。
- ・ このような情勢の中、チェコ語による演劇やオペラが上演できる劇場をつくらうとする動きが起こった。1849 年に国民劇場建設委員会が発足し、国民からの寄付により、1868 年から建設が始まり、1881 年に完成した。しかし、完成まもなく、突然の火災で劇場が焼け落ちてしまう。しかし、人々の誇りは失われることなく、直ちに寄付をはじめ、再建に乗り

出す。再建に必要な費用はわずか2ヶ月で集まったほど、この劇場に対するチェコ人の思いが込められている。こうして、もう一度「国民劇場」の建設が始まり、国民総出の寄付運動によって建てられたといういきさつから、舞台の真上には「国民が己のために」という金の文字が大きく刻まれる。この劇場はその後、「黄金の礼拝堂」という別名も得て、未永くプラハの人々の心の支えなって現代に至っている。

- ・ この国民劇場の建造物としての文化的価値もさることながら、幾度の危機を乗り越え、現在に至るまで国民自らが守り育てていることが、地域の誇りとして受けつがれてきている大きな要因であるといえる。

(3) ペルー共和国、クスコ旧市街地

【「世界のへそ」として、独自文化を守るまちー拠点・要衝】

- ・ 約500年前ペルーで栄えたインカ帝国の首都クスコ。「クスコ」とはインカの言葉（ケチュア語）で「へそ」を意味しており、古代インカ人は自分たちの都を宇宙の中心と考えていた。
- ・ やがてクスコはスペイン人による征服を受けるが、現代まで古代インカの名残が残っている。その一つがインカ時代から都市の中心地であったアルマス広場である。インカを征服したスペイン人もインカ帝国と同様にこの広場を中心としたまちづくりを行っている。同様に、インカから続く儀式として、太陽の踊り「インティラミ」が南米3大祭として毎年6月23日に開催されている。
- ・ 近年ではスペイン語だった通りの名前がケチュア語に変更されるなど、ペルー人は自分の文化に高い誇りを持っている。

(4) イタリア共和国、ボローニャ市

【「保存は革命」を軸に、古い都心の保存・再生と文化的都市をアイデンティティとした地域づくりー町並み・史跡】

- ・ ボローニャは人口約37万人のイタリアの都市で、エミリア・ロマーニャ州の行政と経済の中心地である。また、エミリア・ロマーニャ州は高度に専門化された中小企業が多く集積し、欧州で最も生産活動の盛んな州の一つでもある。また、ボローニャには、ヨーロッパ最古の大学であるボローニャ大学法学部があるなど、大学都市として著名である町である。
- ・ 産業とともにボローニャは、歴史的市街地の保存と再生の取り組みの先駆としても世界的に有名であり、公的資金の投資をニュータウン建設から古都心の老朽化住宅への修復再生へ移行するなど、都市ストックを活用していく取り組みをいち早く実践したことが現在の「欧州文化都市」としてのまちのステータスにつながっている。
- ・ また、2000年には、「ボローニャ2000」と題する文化事業を実践し、延べ2000時間におよぶ300のコンサート、230の展覧会、260のコンベンション等を、これら都市ストックを改修することで実践した。この「ボローニャ2000」の取り組みは、行政、商工会議所、大学そして市民が芸術家や芸術団体と協力して成功させ、公式報告書によると、観光客は23%増加し、GNPで2000億リラ（約140億円）、雇用で1600人の増加があったとされる。

- ・ 町並み等に関する歴史的なストックが既にあったとしても、「保存は革命」であるという発想の転換を思い切って実践できたことが、町の「歴史的な町並みと文化都市」イメージの定着とこれを誇りとする市民による様々な活動につながっていることがいえる。

(5) スペイン、アンダルシア州セビリア市

【春祭り (La Feria de Abril) が地域の誇りの発信の場となるー伝統芸能・祭り】

- ・ “闘牛” や “フランメンコ” は、セビリアを州都とするこの地方が発祥といわれているが、そのスペイン的なイメージを代表する祭りとして「春祭り」がある。
- ・ 「春祭り」の歴史は 150 年余り続いている。もともと、家畜や農機具の見本市であったのが、近郊の村からこの市のために集まった商人のために、キオスク、食べ物や飲み物の屋台、小間物売り、銀行商などの露店ができ、そして宿泊とビジネスの場としてテント小屋ができた。こうして数日間宿泊しながら商談し、仕事の後に仲間内で打ち上げをしたりするうちに、「飲んで、歌って、踊って」というお祭り騒ぎが自然発生し、祭りがメインとなり、春の恒例行事となった。
- ・ 欧州で見られる教会を中心とした厳かな儀式としての祭礼と異なり、庶民の祭りであり、また、本来の祭りの意味を変えて、自分たちが一番楽しむことができる形として、そして、自分達の文化を発信できる場として祭りが存在している。

(6) ネパール王国、カトマンドゥー

【ネワール族の集落 「ヒンドゥの伝説と教え」をまちづくりとして受け継ぐー神話・伝説】

- ・ ネワール族はネパールのカトマンドゥー平野一帯に居住する民族で、ネパールでは6番目に多い民族であるといわれ、ヒンドゥの伝説をまちづくりとしても守り受け継いでいる。
- ・ ヒンドゥの伝説によると、現在のカトマンズの谷は巨大な湖であり、そこにヴィシュヌ神が現れ、円盤で山を切り開き、湖水を流し去ったという。現在でもヴィシュヌ神はカトマンズ谷の守護神として崇められ、谷に至る4本の道の入り口にはこれを祀る祠がある。まちのレイアウトは16世紀に大規模な改修を受けた際に、従来の交易路ではなく格子状の道路パターンに造り替えられている。
- ・ このように、地域の伝説と教えが、地域の町づくりに大きな影響を与えている例として挙げることができる。

(7) インドネシア、バリ島ウブド地区

【「芸術の街」としての誇りを受け継ぐー独自文化】

- ・ バリ島の山間部に位置するウブドは、芸術の村として広く知られている。バリ絵画をはじめ、ガムランにのせて演じられる幻想的なバリ舞踊は伝統的なバリ文化を今に伝えるものとして観光客に絶大な人気があるだけでなく、他所から芸術家を呼びこむ要因になっている。レストランやホテルの多くのは、バリ風の伝統的な造りや装飾が施されており、恵まれた自然環境の中で旅の疲れを癒すことも出来るので、バリ島観光の拠点とする人も多い。
- ・ このまちが「芸術の村」といわれるようになったのは、ウブドの王家が、バリ島の芸術と

絵画を愛し、それを外国に向けたことで世界的に知られることになった。このため、ウブドは芸術の中心地として数々の外国人芸術家、ボネットやスピース、ブランコ、スネルなど多くの外国人画家を魅了した。現在のウブドもその頃とあまり変わらず、ウブドで外国人作家がウブドに何ヶ月も滞在したり、多くの美術館、ネカ美術館やルダナ美術館などでは世界的にも有名なバリや外国人画家の作品を数々発見したりすることが出来る。

- ・ 独自の文化を外へ発信したことが、現在の「芸術の村」としてのイメージを定着し、これがもとに、観光などの産業に結びついた例として挙げることができる。

(8) アメリカ合衆国、ニューメキシコ州サンタフェ

【アメリカ最古のまちとして、インディアン文化を守るまちー独自文化】

- ・ ニューメキシコ州は、アメリカ 50 の州のうち、47 番目と州としての独立は遅いが、インディアンの手により、早くから文化的にも経済的にも発達した土地であった。1600 年代、北東部でようやく植民地ができ始めた時代よりもさらに 100 年も前に、メキシコから進んできたスペイン人によって、インディアンの都市が発見されている。
- ・ ニューメキシコ州の代表的なまちとして、サンタフェというまちを挙げることができる。このまちはアメリカ大陸の開拓者によって作られたまちではなく、先住インディアンと、メキシコからやってきたスペイン人達によって、確固たる文化が築かれていたまちである。このことから、地域の住民は、アメリカ最古のまちとして、また、合衆国内の他の都市とは違う独特なまちであることを誇りとしている。
- ・ 特に、インディアンの伝統を大切にしており、「アドベ」というレンガを使った集合住宅で生活を営んでいる。インディアンが祭りごとを行うための「キバ」という集会場のデザインを州議事堂の設計に取りいれたり、インディアン文化を伝える建築様式を取り入れたものにしなければならないよう法律で定めたりしている。また、教育面などで、自分達の言語や文化を重要視する教育を実施するため、インディアンの家庭教育を道徳教材に用いた書籍等も作成されている。
- ・ このように、地域独自の文化を守り育てようとする思いを誇りとしていることが挙げられる一方で、現在のアメリカの文化・思想とインディアンの文化・思想との乖離から、特に合衆国全土からみるとマイノリティであるインディアンに対する風当たりが強まってきている。その理由の一つとして、英語と地域の言葉のバイリンガル教育などが 1990 年代を中心に行われていたが、バイリンガル教育にともなうコスト高などからその継続的な実施が難しくなっていることなどが挙げられる。

(9) イタリア共和国、ベネチア市

【産業としてのムラーノガラスの技術の継承と誇りー産業・伝統工芸】

- ・ ムラーノガラスはベネチアングラスの代名詞であり、世界のガラス工芸のメッカ「ムラーノ島」に由来する。ムラーノガラスの歴史は古く、12 世紀頃まで遡ることができ、当時、非常に高価なガラスの製造技術秘匿のため、ベネチア共和国がガラス職人をムラーノ島に隔離したため独自の発展を遂げる。ガラス職人達はとても優遇されたが、島抜けは厳罰に

処せられていたほど、ムラーノグラスだけでなく、その職人達が大切にされた。

- ・ 現在ではイタリア観光の一名所になり島内にはギャラリーやみやげ物店が散在し、イタリアの主要輸出産業であり、「水の都」の名称と共に住民の誇りとなっている。
- ・ 品質維持の法律も存在するとともに、職人自身がまちの人々から一目を置かれる存在であることが、伝統工芸をまちの誇りとして受け継いでいく大きな要因となっている。

第3章 モデル地域における歴史・文化を活かした地域づくりの現状に関する調査

3-1 モデル地域調査の目的とモデル地域の設定

(1) モデル地域調査の目的とモデル地域の設定

①モデル調査の目的

第2章の全国調査では、地域の誇りとして考えられる歴史的資源の抽出と、これら歴史的資源を活用した地域づくりの取り組み実態、及び課題の抽出等を行った。また、地域プライドによる地域づくりを実践している市町村等の事例整理を行った。

第3章では、全国からモデル地域として3地域を抽出し、歴史的地域プライドによる地域づくりを実践している市町村及びNPO等の団体へのヒアリングを通じて、それぞれの地域における歴史的地域プライドの共有範囲や拡がり具合、歴史的地域プライドによる地域づくりのメカニズムの分析を行う。

②モデル地域の選定と仮説設定

モデル地域として、「ア. 東中国地域（岡山県及び鳥取県・島根県の一部）」、「イ. 東九州地域（大分県東部、宮崎県のひむか神話街道沿い市町村及び鹿児島県霧島地方）」、「ウ. 北上川流域地域（岩手県及び宮城県の北上川流域の市町村）」の3地域とする。

以下のように、各々の地域の歴史的地域プライドの仮説を設定し、これら地域のいくつかの市町村を対象に歴史的地域プライドの実態に関するヒアリング調査を実施する。

ア. 東中国地域

仮説：「吉備地方」「出雲地方」各々の地域で、歴史的地域プライドによる地域づくりが実践されている。

岡山県を中心とする「吉備地方」は、吉備津彦命・温羅伝説に始まる古代吉備文化の発祥の地として栄え、また、九州・大和・四国など西日本の交通の要所として、各地域の様々な歴史・文化がこの地域を通じて往来し、現在に至るまで多様な産業、経済、文化の振興に大きく寄与してきた。一方で、鳥取県、島根県を中心とする「出雲地方」では、「国引き」、「八岐の大蛇」、「国譲り」など多くの神話が残し、また、出雲の鉄など、大和や吉備の勢力に匹敵するほどの先進地域でもあった。

これら地域固有の歴史・文化資源を地域住民が地域のプライドとして再認識し、地域プライドによる「自立した地域づくり」「自立した人づくり」を行っていることが考えられる。

仮説：「吉備地方」「出雲地方」を同一の文化圏とした地域間の連携による地域づくりが実践されている。

経済的、気象的、地形的な要因により、「吉備」と「出雲」といった別々の生活圏を形成してきながらも、古くは鉄を運んだ「出雲街道」を通じて、近世においては参勤交代や出雲大社への参拝の道として同一の文化圏といえるような緊密な地域性を養ってきた。

これら各々の地域に根付く歴史・文化資源の価値を学びながら、各々の地域がこれらの歴史・文化資源を「地域の誇り＝地域プライド」として受け止め、現在の地域の枠組

みを越えた文化的な視点による新たな地域連携・地域づくりを行っていることが考えられる。

イ. 東九州地域

仮説：古代日本のルーツとしてのプライドを持っている。

日本の始まりは東九州地域であり、多くの神話が残る地でもある。一方で、東九州地域にとって、九州新幹線が開通したことにより、広域交通の主動線としては西九州に重点が置かれ、「裏九州化」してしまう危険性を秘めている。また、中山間地域という地形的な要因により地域間の連携が図られにくいという現状がある地域である。

そこで、日本のルーツであり、日本神話にまつわる歴史・文化資源が多数存在する東九州地域の特色を活かし、これら地域の歴史・文化資源を紐解くことで「地域のプライド」を発掘し、その地域プライドによる地域振興を図っていくことが考えられる。

仮説：宇佐・ひむか・霧島をつなげる神話を切り口とした情報発信と地域プライドの育成を行っている。

宮崎県においては、「ひむか神話街道」の広域観光ルートを設定しており、地域としての一体性を持った取り組みを行っている。宮崎県のみならず、大分県、鹿児島県においても日本神話にまつわる歴史・文化資源が存在するため、宮崎県で展開されている「ひむか神話街道」と連結した「宇佐・ひむか・霧島をつなげる神話を切り口とした情報発信と地域プライドとしての育成を図っていくことで、日本神話をテーマとした東九州プライド起こしが考えられる。

ウ. 北上川流域地域

仮説：水陸万陸の地が生み出してきた歴史・文化は、北上人の精神の源である。

東北の歴史・文化を紐解くと、その多くは北から南へと流れる長さ約 250km に渡る水陸万陸の地である北上川流域で育まれてきた。そして、これら歴史・文化は、一時的に支配される時代があっても、一貫して地域固有の歴史・文化、政治、人々の生活を生み出してきた。つまり、北上川流域で育まれてきた歴史・文化をより深く紐解くことは、東北・北上人の精神の源を紐解く鍵となりうる。

仮説：アテルイから宮澤賢治、そして現代に受け継がれる歴史・文化の発掘と発信による北上人のプライド創発が期待できる。

岩手県盛岡付近から、宮城県石巻までつながる北上川の流域では、古くは縄文時代、アテルイ伝説、前九年の役・後三年の役における安倍一族、奥州藤原氏の平泉文化と義経伝説、そして西行や芭蕉といった歌人や宮澤賢治・石川啄木といった文人によりうたわれるなど、この地を中心に多くの歴史・文化が育まれており、これほど多くの歴史・文化を形成してきた所は、他に類をみないものである。

これら長い時間の中で育まれた歴史・文化を別々の要素としてではなく、1つの文化形成圏として捉え、再発見を行い、さらに地域内へ発信していくことは、北上川流域といった地理的なつながりだけでなく、北上人の精神のつながり、つまり北上人としてのプライド形成につながるものであると考えられる。

3-2 モデル地域ヒアリング調査結果

モデル地域の各地域において、どのようなものが地域の誇りとして受け継がれてきており、どのような取り組みを行っているのか、また、それらが地域プライドとしてなりえているかの現状を把握し、歴史的な地域プライドによる地域づくりを展開していくための視点を導き出すため、ヒアリングを実施した市町村等からいくつかの地域を抽出して、事例分析を行った。

アー①. 岡山県笠岡市白石島

歴史的な地域プライド	白石踊りの継承	
人づくり・地域づくりへの取り組み	教育	・幼稚園、小学校、中学校の各段階における授業への取り入れ ・小さい頃から教え込むシステム
	保存	・ビデオやCDの発行 ・白石踊会による保存伝承活動 ・白石踊りの伝承者養成テキストの作成
	観光	・観光イベントとしての観光客への披露
行政の関わり	・観光振興（イベント支援、パンフレット作成、問い合わせ）支援 ・文化財保護・普及（補助金、文化財解説冊子）	

（地域プライドのキーワード）

- ・「踊り」を組織として守ってきている。
- ・「踊り」を受け継いでいくためのシステムとして、幼少時から学ぶシステムが構築されている。また、この幼少時からの教育システムが、年上を敬う気持ちや学ぶことに対する向上心を生み出す要因となっている。
- ・「踊り」という無形文化財だけではなく、踊る背景としての自然景観である「舞台」がセットで受け継がれている。したがって、「舞台」がない場所では、踊りの本質が失われることを島民が認識している。
- ・行政は、「支援」という立場を基本としている。

アー②. 岡山県総社市

歴史的な地域プライド	古代吉備王国の中心地としての伝説の継承	
人づくり・地域づくりへの取り組み	保存	・伝説を裏付ける遺構（鬼ノ城）の発掘と遺構の保存整備
	活動	・市民劇団「温羅」 ・温羅太鼓
行政の関わり	・文化活動を行うやすいインフラ整備（市民ホールなど） ・鬼ノ城をはじめとする史跡、温羅伝説、市民活動を紹介するパンフレットの作成	

（地域プライドのキーワード）

- ・「伝説」として語り継がれてきたものが、その「伝説」を裏付ける遺構の発見により、身近なものとして感じられたことが地域プライドとなる要因となっている。
- ・鬼（温羅）は、全国的から見るとマイナーな視点であるが、そのことが逆に市民に浸透し

ている。つまり、全国どこにでもあるものではなく、その地域独自のものである考え方が地域プライドにつながっている。

- ・地域プライドを伝える取り組みは市民が中心となって行われており、行政としては、これら活動を行いやすい環境（インフラ）を整備することに主眼がおかれている。

ア－③. 岡山県高梁市

歴史的地域プライド	山田方谷の教えの継承	
人づくり・地域づくりへの取り組み	周知・顕彰	・山田方谷誕生 200 年記念事業 ・顕彰会
	教育	・副読本、マンガの作成
	地域間交流	・藩校サミット
行政の関わり	・記念事業等を通じた全国への情報発信（学習観光事業・フィルムコミッション事業・カレンダーの発行・藩校サミット、シンポジウム・記念碑・顕彰コーナーの設置・漫画の発行）、メディアへの取り上げ	

（地域プライドのキーワード）

- ・地域の誇りとなるべき人物については、その名自体は市民に認知されて入るものの、その功績や思想などの詳細までは周知されていない。
- ・記念事業などにより周知・顕彰活動を行うといった「イベント」的に取り上げることで、地域プライドとして受け継ぐきっかけづくりを行っている。
- ・新聞などのメディアへの取り上げが、地域の人とその人物像なども触れるきっかけとなっている。

イ－①. 大分県安岐町（現国東市安岐町）

歴史的地域プライド	三浦梅園の教えの継承	
人づくり・地域づくりへの取り組み	教育	・梅園先生を称える歌（小学校での教育） ・副読本（小学校の高学年で学習）
	顕彰	・梅園祭（法要の会）
	施設整備	・三浦梅園資料館の建設・運営
行政の関わり	・梅園祭の実施（かつては地域でやっていた行事を行政が引き継ぐ）	

（地域プライドのキーワード）

- ・偉人ゆかりの地というのは全国に多々あるが、その偉人にゆかりがある（例えば、一時期住んでいた、教鞭をとっていた、終焉の地）ことが誇りとなっているのではなく、その地域で立身出世、大成されたこと。つまり、都会へ出て行かなくても、この地でも大成できるという証であることが地域のプライドとして受け継がれてきている要因となっている。

イー②. 大分県中津市

歴史的地域プライド	福沢諭吉の「独立自尊」の精神の継承	
人づくり・地域づくりへの取り組み	教育	<ul style="list-style-type: none"> 副読本、諭吉カルタ、ビデオ等の作成 市内小中学校での弁論大会の実施
	施設整備及び観光	<ul style="list-style-type: none"> 福沢諭吉資料館の建設・運営 旧居の保全と一般公開、周辺整備（レストハウス、駐車場整備）
	交流	<ul style="list-style-type: none"> 小学生を対象とした早慶戦（佐賀市と中津市）の開催 全国高等学校弁論コンクール（慶応義塾との連携）
	周知	<ul style="list-style-type: none"> 市内の小学生でも旧居にいったことがない人が多いため、まずは知ってもらうための活動として、冒険中津事業として福沢旧居をコースに定める。 成人式での福沢諭吉ストラップの配布
	顕彰活動	<ul style="list-style-type: none"> 福沢諭吉記念祭 郷土史を語る会などの民間の活動
行政の関わり	<ul style="list-style-type: none"> 学問の里としてのまちづくりの中心として「福沢諭吉」を定め、弁論大会をはじめ、様々なイベント活動を実施。 福沢諭吉＝中津出身としての認知度が低いために、認知度アップに向けた取り組み 	

（地域プライドのキーワード）

- 全国的に知名度が高い偉人ゆかりの地であるが、その人物が有名すぎることで、中津市＝福沢諭吉と地域と偉人とが一致して認知する人が多くはない。地域と偉人とが精神的につながることで地域プライドを形成する要因となりうる。

ウー①. 岩手県平泉町

歴史的地域プライド	奥州藤原文化の保存と世界遺産登録をきっかけとして地域づくり	
人づくり・地域づくりへの取り組み	施設整備	<ul style="list-style-type: none"> 公園整備 寺院等の保存 世界遺産登録 景観法
	観光	<ul style="list-style-type: none"> 藤原祭り 回遊マップ 観光ボランティア
	交流	<ul style="list-style-type: none"> ときめき世界遺産塾ジュニアシンポジウム
	教育	<ul style="list-style-type: none"> 副読本、社会科見学、写生大会 ふれあい世界遺産塾
行政の関わり	<ul style="list-style-type: none"> 町民とともに行政が一丸となって遺跡を守ろうと取り組む 世界遺産登録をきっかけにさらなる意識統一を図る 景観行政団体として景観形成に取り組む ジュニアリーダーや観光ボランティアの育成に努める 	

(地域プライドのキーワード)

- ・町内の史跡が、現在の町民の生活に身近であること。そして、これら史跡を町民一人一人が守ってきているという自負があることが、地域プライドとなっている要因であるといえる。
- ・また、世界遺産登録や景観法に基づく取り組みなど、町民の地域プライドの方向性と一致するような求心力あるきっかけづくりが地域プライドを増大させる要因となっている。

ウー②. 岩手県水沢市（現奥州市）

歴史的地域プライド	アテルイや三偉人などを輩出してきた地としての誇り	
人づくり・地域づくりへの取り組み	施設整備	<ul style="list-style-type: none"> ・アテルイの里広場 ・道の駅（Zプラザアテルイ） ・アテルイの里（有志で石碑を建立） ・高野長英記念館、後藤新平記念館、後藤寿庵廟、斉藤實記念館他多数
	観光	<ul style="list-style-type: none"> ・アテルイ没後 1200 年祭、高野長英生誕 200 年祭、後藤新平生誕 200 年祭 ・吉小路偉人通り顕彰祭 ・観光ボランティア
	周知	<ul style="list-style-type: none"> ・ミュージカル ・アニメ制作 ・電子紙芝居（HP）
	教育	<ul style="list-style-type: none"> ・副読本
行政の関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・アテルイや三偉人に関してそれぞれ概ね 1 年間に渡り生誕祭等を実施し各種イベントを展開。 	

(地域プライドのキーワード)

- ・多くの偉人が輩出されてきているということ誇りに捉えており、大きなイベントの開催や施設整備を実施してきた。しかし、多くの人物がいること、活躍したのがご当地ではないことなどから、市民の意識が定着せず、継続的な取り組みが展開できない状況にある。
- ・一部の有志においては、地域プライドとして顕彰活動等を進めているが、市民全体への周知や地域プライドとしての取り組み展開など、行政の継続的な参画が今後期待される。

3-3 市民アンケート調査

(1) モデル地域市民アンケート調査概要

モデル地域に住む住民を対象に、地域プライドの実態把握や地域プライドによる地域づくりのあり方等に関する意向を把握するため、以下の4地域の居住者へインターネットによるアンケートを実施した。

地域名（対象者）	回答数
A：北上川流域（北上川流域の市町村に居住する方）	515
B：岡山地域（岡山県下全ての市町村に居住する方）	1,030
C：出雲地域（島根県及び鳥取県の出雲地域に居住する方）	516
D：宮崎・霧島地域（宮崎県内のひむか街道沿道の市町村及び鹿児島県北東部（霧島地域）に居住する方）	507

(2) アンケート調査結果

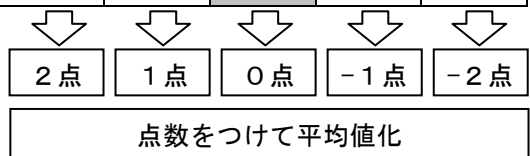
あなたのお住まいの地域について、歴史・文化に対する「誇り」を持っていますか？

- ・ 「誇りを持っている」及び「やや誇りを持っている」との回答は全体で45%、どちらでもないが約40%、「あまり誇りを持っていない」及び「誇りを持っていない」との回答は約15%となっている。
- ・ 地区別に見ると、“C：出雲地域”で「誇り」を持っている回答者の割合が最も高い。
- ・ 居住年数別に見ると、居住年数が長いほど、「誇りを持っている」との回答者の割合が高くなっている。
- ・ また、「生まれてからずっと現在の居住地(地域)に住んでいる。」「一度他所の地域に出ていた(就学や就職などで)が、現在の居住地(地域)に戻ってきた。」との回答者が、地域に対して誇りを持っている割合が、「他所の地域から現在のところに引っ越してきた。」回答者よりも高くなっている。

テーマ別にみた歴史・文化に対する「誇り」について

- ・ テーマ別にみた歴史・文化に対する「誇り」として、「社寺・史跡等歴史的なものが残っていること」、次いで「神話や伝説の地であること」、「古い町並みや建造物があること」を誇りと思っている人が多い。
- ・ これら状況は、都道府県アンケートで、地域の誇りとして考えられるテーマと大きな違いはない。(モデル地域については、神話の舞台である出雲地域及び日向地域を含んでいるため、「神話や伝説の地であること」を誇りとして上げる回答者が多いことが想定される。)地区別に見ると、北上川流域地域では、「地域ゆかりの人、地域出身の偉人がいること」を地域の誇りとして考えている回答者が最も多く、出雲地域及び宮崎・霧島地域では、「神話や伝説の地であること」を地域の誇りとして考えている回答者が最も多い。

誇りと考えられるテーマ	1 誇りに 思う	2 やや思 う	3 分から ない	4 あまり 思わな い	5 思わな い
①地域ゆかりの人、地域出身の偉人がいること (例：地域出身の偉人の考え方や生き様に対する誇り／西郷隆盛など)	352 (30.4%)	450 (38.9%)	218 (18.8%)	107 (9.2%)	30 (2.6%)
②歴史的な出来事が起こった地であること (例：歴史を変える出来事に関する誇り／関が原の戦い、源平合戦など)	211 (18.2%)	353 (30.5%)	434 (37.5%)	130 (11.2%)	29 (2.5%)
③文化や産業の発祥の地であること (例：歴史に残る文化や産業への誇り／和歌発祥の地、杜氏発祥の郷など)	275 (23.8%)	439 (37.9%)	319 (27.6%)	102 (8.8%)	22 (1.9%)
④古い町並みや建造物があること (例：古い町並みや建造物に関する誇り／伝統的建造物群保全地区など)	360 (31.1%)	465 (40.2%)	204 (17.6%)	103 (8.9%)	25 (2.2%)
⑤社寺・史跡等歴史的なものが残っていること (例：社寺・史跡等物的歴史に対する誇り／歴史上の社寺、城跡など)	426 (36.8%)	468 (40.4%)	178 (15.4%)	75 (6.5%)	10 (0.9%)
⑥神話や伝説の地であること (例：神話や伝説の里としての誇り／天孫降臨の神話、義経伝説など)	462 (39.9%)	324 (28.0%)	273 (23.6%)	75 (6.5%)	23 (2.0%)
⑦古来から伝承している踊りや民俗芸能があること (例：古来の民俗芸能を継承している誇り／神楽や舞い、民俗儀礼など)	329 (28.4%)	436 (37.7%)	286 (24.7%)	85 (7.3%)	21 (1.8%)
⑧地域の誇りとなる祭りがあること (例：地域独自の祭りに対する誇り／裸祭り、だんじり祭りなど)	310 (26.8%)	408 (35.3%)	304 (26.3%)	107 (9.2%)	28 (2.4%)
⑨古代に文化や経済の中心地、交通の要衝であったこと (例：歴史上の中心地としての誇り／古代吉備王国、平泉文化、京など)	231 (20.0%)	345 (29.8%)	424 (36.6%)	125 (10.8%)	32 (2.8%)
⑩地域独自の生活スタイル(風習・方言など)があること (例：地域独自の生活習慣に関する誇り／藩(藩校)における教え、茶の湯文化など)	241 (20.8%)	428 (37.0%)	339 (29.3%)	120 (10.4%)	29 (2.5%)
⑪日本を代表するような産業(伝統工芸)があること (例：日本を代表する産業への誇り／焼物、漆器、鋳物など)	236 (20.4%)	350 (30.3%)	411 (35.5%)	117 (10.1%)	43 (3.7%)



【地域別の誇りに思う上位5テーマ】

	1位	2位	3位	4位	5位
全体	社寺・史跡 1.059	神話・伝説 0.974	町並み 0.892	ゆかりの人・偉人 0.853	踊り・民芸 0.836
A：北上川流域	ゆかりの人・偉人 1.208	祭り 0.980	社寺・史跡 0.932	踊り・民芸 0.896	町並み 0.736
B：岡山地域	社寺・史跡 1.074	町並み 1.055	ゆかりの人・偉人 0.802	文化発祥地 0.702	神話・伝説 0.685
C：出雲地域	神話・伝説 1.465	社寺・史跡 1.247	町並み 1.014	踊り・民芸 0.938	文化発祥地 0.910
D：宮崎・霧島地域	神話・伝説 1.255	踊り・民芸 1.145	社寺・史跡 0.915	祭り 0.820	ゆかりの人・偉人 0.700

誇りを持ってないと考えられる理由について

- ・ 地域に誇りをもてない理由については、「地域のことを良く知らないため」、「地域の誇りとなるような歴史・文化等の資源がないため」、「地域のことに興味が無いため」がそれぞれ同程度挙げられている。
- ・ 地域別に大きな違いは見られないが、居住年数別に見ると、居住年数が短い回答者は、「地域のことを良く知らないため」を、居住年数が長い回答者は、「地域の誇りとなるような歴史・文化等の資源がないため」を、誇りを持ってないと考えられる理由として挙げる人が多い。

テーマ別にみた誇りが他の人と共有できると考えられる範囲について

- ・ テーマ別に挙げた誇りの内容について、他の人と共有できると考えられる範囲については、ほとんどのテーマで、「住んでいる都道府県の範囲」を共有できる範囲として考えられている。
- ・ 「地域ゆかりの人、地域出身の偉人がいること」及び「古い町並みや建造物があること」、「社寺・史跡等歴史的なものが残っていること」、「地域の誇りとなる祭りがあること」については、「住んでいる市町村程度の範囲」を共有できる範囲として考えている人も多い。
- ・ 「神話や伝説の地であること」については、「全国規模」ととらえている人も約 20%と共有できる範囲が広いことが分かる。

地域内で行われている様々な活動への参加状況

- ・ 地域内で行われている活動への参加状況を見ると、「祭りやイベントへ参加している（した）」人が最も多く、次いで、「地域内の年上の人などから話を聞いた。」、「図書館や資料館で地域の歴史・文化・民俗資源に関する本や冊子を読んでいる（読んだ）」となっている。
- ・ 一方で、「地域内で行われている活動に参加したことがない」回答者も全体の 25%を占めている。

地域に伝わる歴史・文化に「誇り」を持つために必要なこと

- ・ 地域に伝わる歴史・文化に「誇り」を持つために必要なこととして、「地域の「誇り」を受け継いでいくための伝統行事などの文化事業・文化行事を実施する」、「地域の「誇り」に関する情報を発信する」が多く、次いで「歴史・文化施設等を整備・充実する」となっている。
- ・ 都道府県アンケート調査での取り組み内容と比較すると、現在実施されている内容と市民が求めている内容とに大きな差異は見られない。

地域の誇りによる地域活動への参加意向

- ・ 地域の誇りによる地域づくりへの参加意向について、これら地域づくりが必要であるとの回答者は全体の 9 割超となっている。
- ・ 一方で、「地域の誇りによる地域づくりは必要だと思うが、参加は難しい（したくない）」との回答が全体の約 6 割を占めるなど、地域づくりの必要性と地域づくりへの参加意向とが必ずしも一致しない状況にある。

3-4 モデル調査における歴史的地域プライドによる地域づくりの実態

(1) モデル地域における地域づくりの実態

①東中国地域

ヒアリング調査結果から、東中国地域においては、岡山地域と出雲地域でそれぞれの地域が地域固有の歴史的地域プライドをもって、地域内での取り組みを実践している。これは、瀬戸内海側を中心とした岡山地域、日本海側を中心とした出雲地域といった風土や気候が異なることも大きな要因であることも考えられ、歴史的な地域プライドを考える際に、その地域の風土や気質と切り離して考えることができないことがいえる。

また、岡山地域を見ると、共通するテーマ（例えば、山田方谷など人物にゆかりのある地域における地域づくりの連携・交流）での連携が図られている。

出雲地域については、古代出雲、神話を背景とした精神文化が、出雲地域の歴史的地域プライドとして共有できている。地域づくりへの取り組みをみると、同じ出雲神話であっても、斐伊川を中心としたヤマタノオロチ伝説、須佐神社などを中心としたスサオノ伝説、出雲大社と大国主命を中心とした伝説など、それぞれの固有の神話を中心に地域の誇りとして地域づくりへ展開している。

②東九州地域

東九州地域における歴史的地域プライドは、地形や地勢、気候等の風土と人類が築き上げた歴史から、大分県圏域、宮崎県北部圏域、宮崎県中部から鹿児島にかけての圏域の3つに区分される。

大分県圏域では、各地域で先人、郷土芸能、地場産業などがさまざま存在している。特に、県東部の国東半島などの地域では、東九州としての圏域に加え、瀬戸内海をも圏域として考えられ、九州全域や東九州地域としての歴史的地域プライドの共有よりも、瀬戸内海域としての歴史的地域プライドの共有の方が考えられる。これは、国東半島を中心とした四国との地域の結びつきなど、地域間の交流の歴史から伺うことができる。

宮崎県北部圏域は、宮崎県北協議会が立ち上がり、神話をテーマにひむか神話街道の広域的展開が具現化している。

宮崎県中部から鹿児島にかけての圏域は、神話をテーマとしたプライドと、人類が築き上げた歴史・文化（島津氏、伊東氏）によるプライドが共存しており、各プライドの共有範囲も市内や市内の地区単位と狭くなっている。

③北上川流域地域

北上川流域地域では、北上川を軸として、その水資源や水運、東西を山々に囲われた風土などを礎にして、歴史・文化が形成されてきていることは事実であり、流域地域の共通認識といえる。

歴史的地域プライドとしては、各地域で先人、郷土芸能、地場産業などが様々であるが、北上川を軸として各地域の歴史的地域プライドを発信することにより、各先人等の精神の源を発掘し、北上川流域人としてのプライド形成を図るとともに、北上川流域地域の一連となる地域づくりの可能性が考えられる。

(2) モデル地域の市町村における歴史的地域プライドの現状と歴史的地域プライドによる地域づくりへの展開の実態

①歴史的地域プライドの実態

各々の地域の歴史・文化資源のうち、現在においても生活と密着な関係があるもの（偉人の教えや神楽などの民俗芸能）でないと衰退しているものが多い。また、1つの歴史的プライドに、別の時代の歴史的プライドが重なっていることで、地域として精神的な統一感を共有しにくい状況となっている。

歴史的地域プライドは、地域の住民にとっては身近で当たり前のことであるため、その大切さなどが分かりにくい。外部からの評価や自らが外に行くことによって気がつくことができる。また、神話・伝説などは遺跡の発見など史実と結びつくことが地域プライドとなるきっかけとなる。

歴史的地域プライドに対する継続的な体験や学習が必要であり、小中学生や高齢者は学校教育や生涯学習活動の中でこれらプライドに触れることができるが、高校、大学の段階で地域から外に出て行くことが多く、年齢的なつながりが途切れてしまう。

なお、地域の誇りとするものが、全国的に知名度の低いものであっても、地域独自の考え方といった「独自性」が地域住民の意識に共有できているものであれば、歴史的地域プライドとして形成されている。また、偉人など、地域にゆかりがあるだけでは歴史的地域プライドとして醸成されにくく、地域と偉人との密接な関係が地域住民に感じられて初めて、歴史的地域プライドとして認知されてものとなる。

②歴史的地域プライドによる地域づくりを進めていく場合の視点

歴史的地域プライドが形成されている地域では、地域住民や顕彰団体・保存団体等、市民が中心となった取り組みが行われており、行政はその支援（財政、コーディネート、環境インフラ整備）が中心となった取り組みを行っている。

また、地域プライドによる地域づくりの潮流づくりには、求心力あるきっかけづくり（世界遺産登録運動、重要文化財への指定など）が大きな要因となりうる。

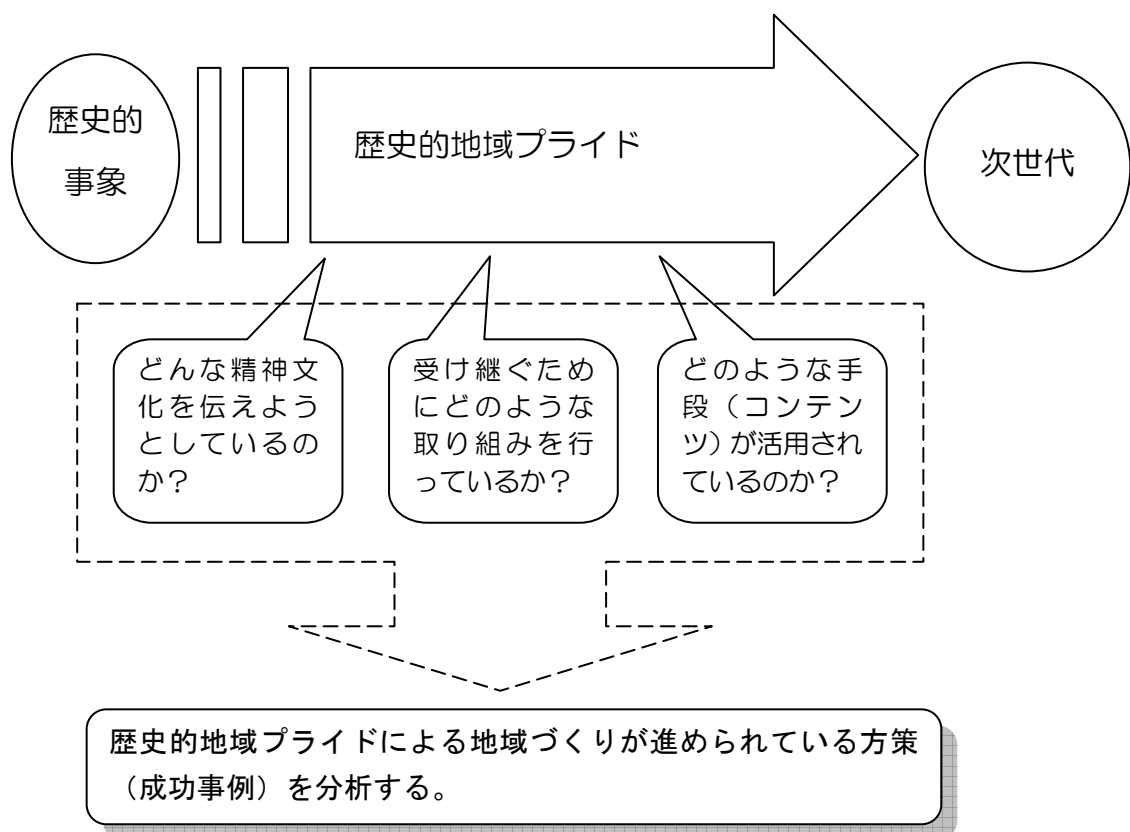
第4章 歴史的地域プライドによる地域づくりの推進方策

4-1 歴史的地域プライド事例分析

(1) 歴史的地域プライドの内容

第2章の全国調査及び第3章のモデル調査を通じて、日本全国のどの地域を見ても、数限りない歴史的、文化的な資源が蓄積されていることが分かる。その中でも、これら資源が単に残っているだけではなく、その背景には歴史的、文化的な出来事等が存在し、地域の人々の誇りや地域独自の精神文化となり、受け継がれ、これらを核に地域づくりに結びついている地域が存在する。

本章では、このような地域プライドによる地域づくりを展開している事例に着目し、地域の誇るべき精神がどのようなもので、その精神を受け継いでいくためにどのような取り組みを行っているのか、それが人づくり、まちづくりにいかに係っているのかを整理する。



①どのようなことが歴史的地域プライド（精神文化）となっているか？

実態調査等で整理した歴史的地域プライドについて、地域の住民が共通の認識を有している理由や、守り育て受け継ぐ行為の背景を分類すると、次の6通りに分類できる。

分類	内容
1. 偉人に対する尊敬	<p>○地域のために多大な貢献をした偉人の思想や教えなどを誇りとして、そのゆかりの偉人に対する感謝や尊敬を現在まで受け継いでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 二宮尊徳（栃木県二宮町） ・ 中江藤樹（滋賀県高島市（旧安曇川町）） ・ 山田方谷（岡山県高梁市） ・ 福沢諭吉（大分県中津市） ・ 三浦梅園（大分県国東市（旧安岐町））
2. 先人の行為に対する感動	<p>○主に土木事業など、地域の発展に多大な貢献を果たした先人を顕彰し、その先人達によって作られたものを守り受け継いでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 五庄屋伝説（福岡県うきは市） ・ わらじ村長（宮城県高崎市（旧鹿島台町）） ・ 千田左馬（岩手県奥州市（旧前沢町））
3. 地域の思想として共感	<p>○乱世の時代での平和社会への思いや、江戸時代の藩の教育理念などを誇りとして、現代の生活のなかで受け継いでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 凌霜の精神（岐阜県郡上市） ・ 日新館の教え（福島県会津若松市） ・ 火伏の虎舞（宮城県加美町） ・ 稲村の火（和歌山県広川町） ・ 島津日新公のいろは歌（鹿児島県南さつま市（旧加世田市））
4. 生活風習・礼儀作法	<p>○地域独自の生活風習や礼儀が現在においても生活の一部として定着している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ お茶文化（島根県松江市） ・ 白石踊り（岡山県笠岡市） ・ 恩納ナビー（沖縄県恩納村）
5. 歴史的な中心地としての誇り	<p>○かつての政治・経済・産業の中心地として、その地域が輩出・創出した先人の形跡や産品を誇りとして守り受け継いでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 南部杜氏（岩手県花巻市（旧石鳥谷町）） ・ 奥州藤原文化の保存（岩手県平泉町） ・ 旧後藤家商家交流資料館（宮城県都城市（旧高城町））
6. 神話や伝説の地としての誇り	<p>○神話や伝説を地域の誇りとして語り受け継いでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ひむか神話（宮城県全域） ・ 国造り神話（島根県出雲地方） ・ 温羅伝説（岡山県総社市）

②コンテンツの内容

歴史的地域プライドを守り育て、受け継ぐために活用されているコンテンツを以下に整理する。

	分類	コンテンツ
教育システム	1. 就学前教育 <ul style="list-style-type: none"> ・ 遊びの中での学習 ・ 歌として学習 ・ 映像コンテンツによる学習 	○絵カルタ <ul style="list-style-type: none"> ・ 石見銀山遺跡を伝える絵カルタ（島根県大田市） ・ いろは歌カルタ（鹿児島県南さつま市） ・ 諭吉カルタ（大分県中津市） ○アニメ <ul style="list-style-type: none"> ・ 長編アニメ「アテルイ」（岩手県、シネマとうほく） ・ 堂之上遺跡紹介アニメ（岐阜県高山市） ○童謡、歌 <ul style="list-style-type: none"> ・ 新民謡「チャグチャグ馬コ」（岩手県滝沢村） ・ 「梅園先生をたたえる歌」（大分県国東市（旧安岐町）） ○絵本 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「稲むらの火 濱口梧陵の話」（和歌山県広川町、わかやま絵本の会） ・ 「黄泉比良坂」（島根県東出雲町）
	2. 学校教育 <ul style="list-style-type: none"> ・ 総合的学習としての教材 ・ 社会見学 	○教科書副読本、小学生用読本 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「田んぼをつくった水の道～北海幹線用水路物語」（北海道空知地域） ・ ふるさと読本「いずも神話」（島根県） ・ 「少年少女のための梅園先生」小冊子（大分県国東市（旧安岐町）） ・ 玉湯なんでも大事典（島根県松江市（旧玉湯町）） ○紙芝居 <ul style="list-style-type: none"> ・ 道仏神楽の由来を伝える紙芝居（青森県階上町） ・ 「後藤新平絵物語」（岩手県水沢市） ・ 「野国總管物語」（沖縄県嘉手納町） ○漫画 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「まんが小村寿太郎 日本が生んだ世紀の外交官」（宮崎県日南市） ・ 「斉藤憲三ものがたり」（秋田県にかほ市） ・ 「酒田に本間光丘あり」（山形県酒田市） ・ まんが「山田方谷伝記」（岡山県高梁市）
	3. 地域教育・活動 <ul style="list-style-type: none"> ・ 生涯学習としての展開 ・ 保存会、研究会による保存・継承活動 ・ NPO活動による展開 	○映画 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「近江聖人中江藤樹」（滋賀県高島市（旧安曇川町）） ・ 「バルトの楽園」（徳島県鳴門市） ○テキスト、地域事典 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「白石踊り伝承者養成テキスト」（岡山県笠岡市） ・ 「大社まちかど百花」（島根県出雲市（旧大社町）） ○公開講座、市民講座 ○体験型ワークショップ ○機関誌発行

分類	コンテンツ
<p>4. 芸能、祭り・イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 神楽や祭りの継承、顕彰活動 ・ 民俗芸能の実演（観光イベントや他地域イベントへの参加） ・ 地域の歴史を創作オペラや創作劇で展開 	<p>○ビデオ、DVDへの記録、HPによる公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 祭りや伝統芸能、伝統技術（たたら製鉄）等のビデオ等への保存 ・ 祭りや伝統芸能、伝統技術等の記録動画をHPにより公開 <p>○神楽イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オリジナル宇治田楽（京都府宇治市） ・ スサノオスピリット（島根県出雲市（旧佐田町）） <p>○創作オペラ、ミュージカル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オペラ支倉常長「遠い帆」（宮城県石巻市） ・ 「細川ガラシャ物語」（京都府長岡京市） ・ ミュージカル「銀河鉄道の夜」（岩手県花巻市） <p>○市民創作劇</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 町民劇場「千田左馬物語 いのちの水」（岩手県奥州市（岩手県奥州市（旧前沢町）） ・ 演劇「華岡青洲の妻」（和歌山県紀ノ川市） ・ 市民劇団「温羅」（岡山県総社市）
<p>5. 研究・調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域資源、観光資源としての広報 	<p>○パンフレット、広報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「もう一つの温羅伝説」（岡山県総社市他） ・ ひむか神話街道50の物語集、100の伝承地マップ（宮崎県） ・ ガイドブック「どこにしようと、そこがドイツだ」（徳島県鳴門市） <p>○HPによる公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ みやざきひむか学ネット（宮崎県教育研修センター） ・ デジタル岡山大百科（岡山県立図書館） ・ あいち地域資源デジタルアーカイブ（愛知県） <p>○調査報告書、市町村誌</p>
<p>6. 産業・観光化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地場産業、伝統工芸とのマッチング ・ キャラクター化 ・ 商品開発 	<p>○観光パンフレット、広報、HP</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 市町村、各種施設のパンフレット ・ 大和路アーカイブ（奈良県観光情報） <p>○商品開発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「伊能歌舞伎米」（千葉県成田市（旧大栄町）） ・ 神楽グッズ（大分県由布市（旧庄内町）） <p>○キャラクター</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 硯のけんちゃん（宮城県石巻市） ・ 町のイメージキャラクター「スサノオ」（島根県出雲市（旧佐田町））

③歴史的地域プライドとして受け継がれてきている理由

実態調査等から歴史的な地域プライドが受け継がれてきている仕組みについて分類すると、次の6通りに分類できる。

分類	内容
<p>1. 一貫した地域教育システムがつけられている</p>	<p>○歴史的な地域プライドを受け継いでいく人材を育てるため、歴史的な地域プライド自体を学校教育や生涯学習のプログラムに組み込んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中江藤樹（滋賀県高島市（旧安曇川町）） <ul style="list-style-type: none"> …副読本に藤樹先生の教えを盛り込むとともに、小学3年生を対象とした「立志祭」や「新春書き初め奉納」を実施。また市民対象に「中江藤樹フォーラム」や「藤樹先生書道展」の開催、映画「近江聖人中江藤樹」の製作などを行い、教えを受け継ぐ ・ 平成遣欧少年使節海外派遣事業（宮崎県西都市） <ul style="list-style-type: none"> …天正遣欧少年使節団として13歳にしてローマに赴き、法王に謁見した偉業を成し遂げた伊東満所の功績を受け継ぐため、毎年、市内中学生2名をヨーロッパに派遣し、伊東満所の精神を体験させる取り組みを実施。 <p>○行政方針や教育方針に掲げている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 凌霜の精神（岐阜県郡上市） <ul style="list-style-type: none"> …「凌霜の精神（厳しさ、我慢を乗り越える精神）」を合併新市の教育方針の柱として掲げる。
<p>2. 人材や組織が存在し積極的に活動している</p>	<p>○守り育てていこうとする人材や組織が存在し、活動している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NPO高城歴史文化のまちづくりフォーラム（宮崎県都城市（旧高城町）） <ul style="list-style-type: none"> …地域の象徴として旧後藤家商家保存を保存するとともに、クラシックコンサート、落語会、なんこ（酒の席のゲーム）大会、雛人形展等、楽しみながら文化の伝承に取り組む。 ・ 町民劇場（岩手県奥州市（旧前沢町）） <ul style="list-style-type: none"> …先人の功績を守り受け継ぐため、町民自らが自作自演する演劇に取り組む。 ・ 火伏の虎舞（宮城県加美町） <ul style="list-style-type: none"> …毎年4月末の祭りに向け消防団員が小学校高学年生に指導しながらお囃子や舞とともに、防火の精神を守り受け継ぐ。
<p>3. 対外的評価が与えられ住民の意識が高揚している</p>	<p>○歴史的な地域プライドの象徴であるものが対外的に評価されることにより、地域の住民にも一層認識されるようになっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 白石踊り（岡山県笠岡市） <ul style="list-style-type: none"> …島民ならば誰でも踊れるという共有意識や外部機関からの評価、無形重要文化財指定が誇りの要因ともなる。 ・ 平泉遺跡（岩手県平泉町） <ul style="list-style-type: none"> …保存状態が優れていることに対する対外的評価が加わり、これまでに増して歴史的資源を守るという町民意識が高揚している

分類	内容
<p>4. 現代人の生活スタイルに合わせて様式・様態の変化させている</p>	<p>○若者も興味を持てるよう変容させている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ あいづっこ宣言（福島県会津若松市） …「日新館の教え」を現代版にアレンジするとともに、副読本もテーマごとにビジュアルに作成するなど、幼少の頃から生活と密着したものとなる ・ いろは歌カルタ（鹿児島県南さつま市（旧加世田市）） …薩摩の郷中教育の基本書としての「日新公いろは歌」を小中学生にも受け入れやすくするため、カルタを作成している。年に一度はカルタ大会を実施している
<p>5. 他地域との情報共有により価値を明確に示している</p>	<p>○関連する他の地域との連携し、一体となり歴史的地域プライドを守り育てている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 報徳サミット（小田原市、二宮町他） …財政再建や農村振興に大きな功績を残した二宮尊徳の「報徳精神」を顕彰するため、報徳サミットを開催し、交流を深めている。
<p>6. 継続的な取り組みを可能とする経済基盤が整っている</p>	<p>○地場産業との連携や観光資源として展開することにより、経済的基盤を整えながら受け継がれている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 南部杜氏（岩手県花巻市（旧石鳥谷町）） …酒造りの道具が重要民俗文化財に指定されるとともに、「冬の出稼ぎ」イメージから全国に誇れる人材輩出の地として町民の意識高揚を図る。

4-2 歴史的地域プライドによる地域づくりの視点整理

(1) 歴史的地域プライドが表出した形（祭りや芸能、町並みなど）を、その地域に正しく残すことの重要性：場所性

歴史的地域プライドは、“精神”文化であるため、プライド自体は目には見えないものの、祭りや伝統芸能、町並みといった、目に見える形（精神文化が表出した形）で受け継がれている場合が多い。一方で、“精神”文化そのものは、その地域に住む人が、その地域で生活する上で心の拠り所になるものであり、場所や位置関係、気候などの自然環境とも密接に関係している場合が多く、まさに、地域固有の“精神”文化であるといえる。したがって、これら“精神”文化が表出した形はその地域でないと歴史的地域プライドとしての意味を成さないものである。

これまでの地域づくりにおいては、ある地区での成功事例を参考にして、良く似た形のもを創作したり、模して実施したりしてきた。しかし、これら似せて創作したり、模したりしたものは、精神文化が表出した“形”のみであり、その根底にある精神文化を別の場所で受け継ぐことはできないと言える。つまり、地域固有の“精神”文化はその地域で守り受け継ぐことに意味があり、守り受け継ぐという行為は、その地域に住む人の義務であるとも言うことができる。

また、その地域で守り受け継ぐためには、歴史的地域プライドに関する情報・資料を集約して整理することも重要である。あらゆる方向からのあらゆる情報が氾濫する時代において、真に守り受け継ぐべき情報が整理されていないと、地域の次世代へ伝えることが難しく、まずは、情報収集・情報整理に取り掛かることが重要なポイントである。

(2) 歴史的地域プライドの醸成には時間がかかるものであり、時間をかけて受け継いでいくことで価値が高まり、地域づくりへの成果が表れる：時間軸

歴史的地域プライドによる地域づくりを進める上で、その地域に住む人がその精神文化を理解し、納得することが不可欠であり、精神文化を強要するものではない。さらに、歴史的地域プライドを守り受け継ぐ“人”を育てることが重要なことであり、じっくりと地道な取り組みを進めていくことが、その地域の精神文化に基づく個性ある“人”づくりにつながり、これにより地域が一丸となった人間力、地域力を発揮できるようになると考えられる。

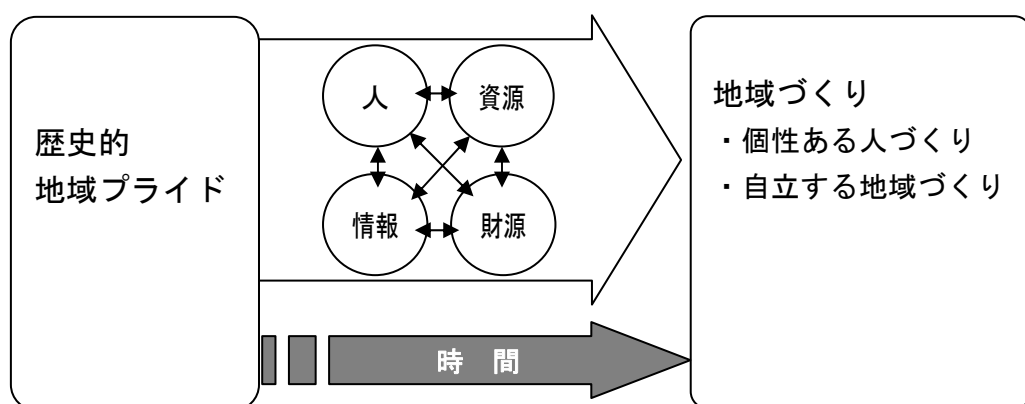
また、歴史的地域プライドは地域の「文化資本」として捉えることができる。「文化資本」とは、使えば使うほど価値がなくなる（減価償却する）一般的な投資資本と異なり、使えば使うほど、続ければ続けるほどその価値が上昇する可能性を秘めたものである。歴史的地域プライドを「文化資本」として守り受け継ぐ取り組みを続けることにより、その価値が向上し、地域の自治への一助ともなる。

様々な取り組みを行う上で、近年の国及び地方の財政事情等から、費用対効果など成果が見える取り組みを行うことが求められているが、歴史的地域プライドによる地域づくりを進めることに関しては、短期的な成果や効果を期待するのではなく、時間をかけて取り組んでいくことが重要なポイントである。

(3) 地域づくりへ継続・発展させるための4つの要素

歴史的地域プライドを守り受け継ぎながら地域づくりを行うためには、上述した「場所性」と「時間軸」の視点に加え、次の4つの要素が互いに関連し、機能することが必要である。

- **人** : 歴史的地域プライドを受け継いでいくのは、“地域住民”が中心であることから、歴史的地域プライドに共感をもつ人材をいかに確保していくのかという視点が必要である。
さらに、歴史的地域プライドを守り受け継いでいくための様々な取り組みを進めるリーダー的人材の存在や、地域の取り組みに関して総合的に判断できるプロデューサーの存在が重要である。
- **資源** : 精神文化である歴史的地域プライドを守り受け継ぐためには、プライドを象徴するもの=目に見えるもの(祭りや芸能、史跡、町並みなど)を守り受け継ぐことが重要である。また、その象徴を再評価したり、現在生活と乖離しないよう変容させたりしていくことも必要である。
- **情報** : 歴史的地域プライド(及びその象徴)を人(次世代)に伝えていくことが不可欠である。そのためには、断片的に事象や象徴をとらえるのではなく、情報の集約とともにストーリーとして情報発信することが重要である。また、多くの手法や媒体を駆使し、幼児からお年寄りまで多くの人に発信することが必要である。その他、他地域の事例研究や、同じ歴史的地域プライドを有する他地域と共有・相関することにより、より強固な歴史的地域プライドの維持、地域づくりの展開が期待できる。
- **財源** : 歴史的地域プライドは、地域の経済成長を図るためにあるものではないが、守り受け継ぐための取り組みを継続させるためには、財源が必要とされることも多い。そのため、補助金制度等の活用や、歴史的地域プライドと伝統産業の連携や観光資源化、新産業への展開など財源の調達方法を確立することが重要となる。



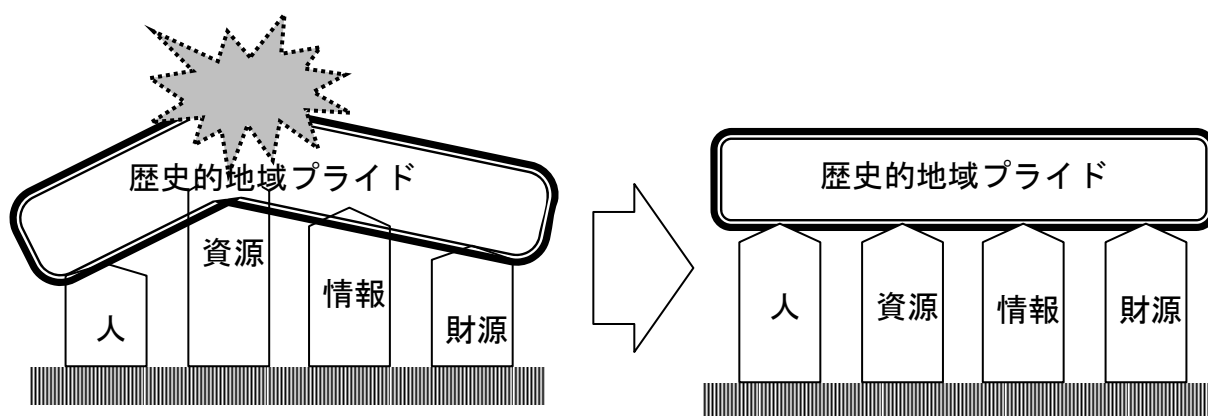
4-3 歴史的地域プライドによる地域づくりの推進方策

(1) 基本的な考え方

歴史的地域プライドによる地域づくりのポイントとして、「人」・「資源」・「情報」・「財源」の4つの要素がバランスよく機能することが重要である。言い換えれば、4つの要素のどこかが衰退するとバランスが崩れ、歴史的地域プライドも受け継いでいくことが困難となってくる。

例えば、歴史的な資源が多く存在している地域で、その資源を活かした地域づくりを実施しても、その資源の根底にある精神文化が理解されていない、または、共有されていないと、単発的なイベントとなったり、歴史性に関連のない、いわゆる金太郎飴的な取り組みになってしまったり、強いては継続した取り組みに至らない場合が多い。

したがって、歴史的地域プライドによる地域づくりを推進するためには、4つの要素が健全に機能しているかを的確に調査・検証することが重要となる。その上で、不足している要素を補完・充実する方法を検討し、実践することが必要である。



(2) 基本的な進め方

歴史的地域プライドによる地域づくりの基本的な進め方は、次の2段階で整理される。

Step 1 : **歴史的地域プライドの現状分析**

歴史的地域プライドによる地域づくりを進めるためには、歴史的地域プライドの現状を調査し、把握することが必要である。

どのような精神文化があり、どのように受け継がれてきているのか、これまで取り組んできた主体の意向と住民意識との差異はないかなどを調査するとともに、前述した4つの要素のバランスがどうであるかを分析することが必要である。

↓

Step 2 : **今後の展開・充実すべき方策の検討** (→次項参照)

現状分析をふまえた今後の展開方策を検討する。歴史的地域プライドそのものは他地区のものを用いることができないが、4つの要素で不足しているものや充実すべき要素については、他地区の事例を参考にしながらその要素を補完・充実するための方策を検討することが可能である。

例えば、人づくり⇒地域教育、リーダー育成、プロデューサーの育成
資源活用⇒資源の再評価（時代の変化に対応）、きっかけづくり
情報発信⇒情報発信能力の向上、情報ネットワークの構築
財源確保⇒資金調達能力の向上、新たな支援策の検討 など

(3) 推進方策の整理

前項で整理した4つの要素ごとに、今後の展開・充実するための具体的な方策を整理する。また、実態調査等で把握した取り組み事例をあわせて紹介する。

①人材確保

- ・ 歴史的地域プライドは、その地域に住む人々が生活するにあたっての精神的な土台となることが必要であり、地域の誰もが知っていることが最低限必要である。そのためには、幼少の頃から家庭や地域とのかかわりの中で教育、もしくは学習していくことが望ましいが、就学や就業といった生活の変化の中で、歴史的地域プライドを忘れてたり、もしくは、新しく生活の場となった地域においては、歴史的地域プライドを知る機会がないといった状況に陥る可能性がある。したがって、あらゆる世代に対応した地域教育の充実や歴史的地域プライドを受け継ぐための学習プログラムを構築することが重要である。
- ・ 歴史的地域プライドによる地域づくりを進めていくにあたっては、その歴史的地域プライドを意思的に受け継ごうとする人材や組織の存在が重要なポイントとなる。これら人材や組織には、自らの地域を発展させようとする強い意思と、地域づくりのリーダーシップを発揮できる資質を兼ね備えていることが望まれる。そのためには、人材や情報など多方面のネットワークを構築しながらリーダー的存在を育成することが重要となる
- ・ 地域づくりを実践するにあたっては、多様な障壁を乗り越える必要があるとともに、中長期的なビジョンを持った行動を行うことが必要となる。そのため、専門的な視点だけではなく、総合的・経営的な視点をもつプロデューサーの育成が必要となる。リーダーは当該地域の中から生まれ育つことが期待されるが、プロデューサーは経営的な視点持ち、プロデュース機能やコーディネート機能を総合的に発揮できるものを当該地域外から招集することも十分考えられる。

目 標		具体的な方策
地域教育の充実	地域プライドを受け継ぐ学習プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校教育・社会教育を通じた一貫した学習プログラムの展開と、その中で担い手を育成するシステムの構築（プログラム上の工夫）（⇒取り組み事例①） ・ 「地域学」等の調査研究と成果の反映（⇒取り組み事例②） ・ 親子参加型や体験型による参加者の拡大 ・ 地域づくりインターンシップ等による青少年の参加の促進（⇒取り組み事例③） ・ 「地域学」検定による評価 など
リーダーの育成	ネットワークの構築によるリーダー育成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係団体のネットワークの構築とネットワークによるリーダー育成の展開 ・ 共通の地域プライドをテーマとする広域のネットワークの構築とリーダー育成の拡大 など
	大学等の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学や研究機関、企業等との連携による人材育成（⇒取り組み事例④）
プロデューサーの育成	経営的視点を持つプロデューサーの育成	<ul style="list-style-type: none"> ・ プロデュース機能やコーディネート機能を総合的に発揮できる人材の育成 ・ 地域内外から経営的視点を持つ人材の招集

②資源活用

- ・ 歴史的地域プライドは歴史的な地域固有の精神文化であるため、目には見えないものである。つまり、その精神文化を地域住民が共有するためには、①人材確保における推進方策として挙げた「教育」、「学習」という手段の他に、その“精神文化が表出したもの＝資源”を守り受け継ぐことが重要となる。これら“精神文化が表出したもの＝資源”を将来にわたっても守り受け継いでいくためには、その資源を再度見つめ直し、評価を与えることにより、地域住民にその重要性を再認識させることが有効である。これら資源は地域住民にとっては、ごく身近なもので重要視されていない場合が多く、外部からの評価を受けることや同じようなプライドを持っている地域との交流により、その重要性を再認識し、意思を持って守り受け継いでいくことが必要である。
- ・ また、前述のように地域住民にとっては、日常的な振る舞いそのものが歴史的地域プライドになっている場合が少なくなく、これらを地域づくりの核として据えるためには、意識づけのためのきっかけづくりが重要となる。しかも、時代が移り変わって、住民の生活スタイルや価値観等が多様化している現在そして未来においても、守り受け継いでいくためには、時代に応じて変容させながら取り組むことも必要である。

目 標		具体的な方策
資源の再評価	外部からの評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資源の調査・研究 ・ 重要文化財指定、世界遺産登録 (⇒取り組み事例⑤) ・ 地域プライドの取り組みに関する表彰 ・ 観光客による評価 など
	広域型の地域プライドの発掘	<ul style="list-style-type: none"> ・ 隣接地域の共通テーマの掘り起こしと広域型地域プライドの展開 (合併地域の共通テーマとしても有効)
きっかけづくり	象徴となるものの継承	<ul style="list-style-type: none"> ・ 史跡・町並みの保存と付加価値の創出 ・ 足跡、研究資料等を集約した記念館等の整備 (⇒取り組み事例⑥)
	変化する生活スタイルへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現代人の志向に合わせた変化への誘導 (舞踊→ダンス、神楽→オペラなど) (⇒取り組み事例⑦)
	住民が改めて認知するための取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現代人が興味を持つ取り組みへ展開 (体験型・参加型、景観、環境、食、イベント等) ・ 政策的な取り組み (行政計画への反映、景観法にもとづく取り組み、商業・観光施策との連携など) (⇒取り組み事例⑧)

③情報発信

- ・ 歴史的地域プライドによる地域づくりを進めるには、まず、地域住民に歴史的地域プライドを周知し、共通認識として確立することが必要である。住民の行動範囲が拡大し自らが情報収集できる時代にあつて、インターネットなど多様な情報媒体による多種多様な情報が錯綜している中、住民の関心・興味を引き出すような情報発信能力を向上することが重要である。また、歴史的地域プライドは、幼少の頃から、お年寄りまで多くの世代で共有することが重要であるため、その世代に応じたコンテンツも用意することが望まれる。
- ・ 歴史的地域プライドによる地域づくりを実践するためには、取り組み主体から情報を発信するだけでなく、今後の展開を検討する上では地域住民の意見や他地域の情報を収集することが不可欠である。地域プライドに関しては、既に文化庁や国土交通省、都道府県レベルで県内情報の収集、及びホームページなどで情報発信している例が見られるが、これらとの連携を図るなど、他地域の取り組み事例の研究や交流を図る土台として全国の情報ネットワークを構築することが有効である。

目 標		具体的な方策
情報発信能力の向上	コンテンツの工夫	・多様なコンテンツづくり（アニメ、映画、音楽、演劇など）（⇒取り組み事例⑨）
	情報の集約	・全国及び各地域におけるプライドライブラリーの構築
情報ネットワークの構築	情報共有	・既存HPの活用・連携（⇒取り組み事例⑩） ・地域プライドデータベースの構築
	交流できる場づくり	・活動拠点の設置 ・同種の地域プライドを有する地域との交流（⇒取り組み事例⑪） ・地域プライドフォーラムの開催（⇒取り組み事例⑫）

④財源確保

- ・ 地域づくりを行うためには、資金が必要となる。特に、歴史的地域プライドによる地域づくりについては、短期間で効果が上がるものではなく、中長期で取り組んでいくべきことであるため、資金調達能力の向上、経済的な基盤を整えておくことが重要なポイントとなる。地域住民の発意による資金調達や地場産業などとの連携による収益構造の構築が今後の展開として考えられる。また、補助事業等に関しては、昨今、費用対効果が求められ、短期間で効果が表れる事業の重点化が謳われているが、その一方では、地域からの提案で柔軟性の高い資金投入が可能となってきた。その活用を十分に検討することが有効である。

目 標		具体的な方策
資金調達能力の向上	収益構造の検討	・寄付・基金・トラストなど ・地場産業とのマッチング、観光資源としての活用など（⇒取り組み事例⑬）
	支援制度の活用	・既存支援制度の周知及び活用アイデアの発信など ・地域提案型・市民提案型事業への提案の促進

【取り組み事例一覧表】

取り組み事例①	<p>事例 1-1：滋賀県高島市</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学生対象には学校行事「立志祭」や「藤樹かるた大会」、小学校副読本「藤樹先生」、そのた「新春書き初め奉納」などを実施し、中江藤樹の教を教えている。 市民向けには伝統行事として「藤樹書院の講書初め」、「常省祭」、「藤樹祭」、「中江藤樹フォーラム」などを実施し、中江藤樹の教を受け継いでいる。
	<p>事例 1-2：白石踊り(岡山県笠岡市)</p> <ul style="list-style-type: none"> 島民ならば誰でも踊ることができ、島外の高校進学までに身につけるべきものとして認識されている。白石島内で授業として取り入れている。 幼稚園—小学校、小学校—中学校の連携の形で、総合学習の一環として行われており、会のメンバー6～7人が教えている。
取り組み事例②	<p>事例 2：いわて地元学(岩手県)</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域が今までやっていたこと、地域のありようを再発見することを、地元に住んでいる人が主体的に行う。 地域における持続的で地道な取り組みで、地域の人々のつながりを取り戻す取り組みを進める。
取り組み事例③	<p>事例 3：ふれあい世界遺産塾(岩手県平泉町)</p> <ul style="list-style-type: none"> 一関・水沢・千厩地域における小・中・高校生を対象に実施 地域プライドを受け継ぐ人材育成(ジュニアリーダーの育成)を進めている
取り組み事例④	<p>事例 4-1：いなみ野ため池学(兵庫県、兵庫大学)</p> <ul style="list-style-type: none"> 東播磨地域の特徴的な景観をかたちづくる「ため池群や水路網」は、先人たちが営々として築きあげてきた、かけがえのない財産である。 それらが持つ歴史的・文化的価値や現代的意義を見つめ直し、これからの地域づくりへ活用していく道を探るため、現役の大学生とともに地域住民が学習する講座『いなみ野ため池学』を開講。
	<p>事例 4-2：ふるさと学習会(熊本県美里町(旧中央町)、熊本大学)</p> <ul style="list-style-type: none"> 熊本大学では、地域貢献への取組みとして「地域貢献特別支援事業」を実施しており、事業を通じて大学がもつ「知・人・物」敵資源を地域との間で循環させ、ともに支えあう環境構築を目指している。 当該事業の個別事業として、「熊本文化発掘事業」を実施し、熊本県美里町(旧中央町)に数多く存在する中世から近現代に及ぶ長期間に建造された石造遺物を歴史資料としての調査・記録する調査を実施した。 この調査結果については、「ふるさと学習会」(町内の自然・歴史資料を中学生たちが歩きながら学んでいく企画)において、調査に参加した学生・院生たちが講師として参加しており、調査の成果を「人づくり」に活かしている。

<p>取り組み事例⑤</p>	<p>事例 5：南部杜氏(岩手県花巻市(旧石鳥谷町))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・杜氏は冬の「出稼ぎ」であったため、暗いイメージがあったが、「期間就労の集団」として地域の誇りにしようと意識改革をはじめ、昭和 56 年に酒造用具が国の重要有形民俗文化財に指定され、歴史民俗資料館の整備を行うなど、「南部杜氏」に対する町民の意識が大きく変化した。
<p>取り組み事例⑥</p>	<p>事例 6：旧後藤家商家(宮崎県都城市(旧高城町)、NPO高城歴史文化のまちづくりフォーラム)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧家後藤家に生まれた後藤伊左エ門は、私財を投資し高城村の産業(造林事業、養蚕業、綿花事業)を発展させた人物である。 ・後藤伊左エ門が残した地域の歴史、町民の誇りがつまっている旧後藤家商家を保存し、薩摩藩の精神を守り伝えている。また、商家に残るピアノの修復をきっかけとしたクラシックコンサートや、商家に残る昔の教科書展、高城昔の写真展、なんこ(南九州に古くから伝わる酒の席のゲーム)大会や雛人形展等により、楽しみながら文化の伝承に取り組んでいる。
<p>取り組み事例⑦</p>	<p>事例 7：あいづっこ宣言(福島県会津若松市)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・侍の男の子は6歳になると必ず侍という自分の住む地域のグループに加わり、年少者は年長者への礼儀と尊敬、同年者との友情を自然に身につける。武士としての日新館教育の前に、自然の遊びのうちに人の道、社会人としての基本を学ぶ。 ・現代版侍の掟「あいづっこ宣言」の策定し、日新館教育を各学校や家庭に配り、子どもの集まりなどで唱和し、理解と実行を深める。
<p>取り組み事例⑧</p>	<p>事例 8-1：岩手県平泉町</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奥州藤原文化発祥の地であることを誇りに持つことを憲章に盛り込み、まちづくりの理念に掲げている。 ・町並みを保存するため、平成 17 年 1 月景観条例施行し、コアゾーン・バッファゾーンについては建築等を事前協議し、許可制としている。さらに、看板等についても、規制。既存のもの撤去についてはお願いしている。 <p>事例 8-2：ひむか神話街道(宮崎県)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古事記や日本書紀に記されている日向神話をはじめ、歴史ロマンを彷彿とさせる数多くの伝説や史跡にあふれ、歴史資源の宝庫となっている。 ・ひむか神話街道は 14 市町村 300 km であり、点としてそれぞれ取り組みを線としてつなぐことで大きな誇りを作り出し、交流人口の拡大を目的としている。特に県北部の 5 町村では宮崎県北協議会が設立され、ふれあい案内人やもてなしを通じて地域の歴史・文化に触れるなど、すそ野は広がっている。
<p>取り組み事例⑨</p>	<p>事例 9：多様なコンテンツの紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長編アニメ： <ul style="list-style-type: none"> 命をかけて祖国を守ろうとしたアテルイ・モレと坂上田村麻呂との戦い。アテルイの思い、坂上田村麻呂との友情を伝えるため、県民の寄付等で製作。(岩手県) ・映画： <ul style="list-style-type: none"> 中江藤樹に関する映画を製作。映画にはエキストラとして市民も多数参加。(滋賀県高島市)

	<ul style="list-style-type: none"> ・町民劇場： 水利が悪かった胆沢平野に後藤寿庵の後を引き継ぎ、胆沢川からの用水路を開鑿した千田左馬の功労が称えて町民の自作自演の演劇を実施した。(岩手県奥州市(旧前沢市)) ・HP紙芝居： 先人の功績をたたえて、記念館を整備するとともに、HPに紙芝居を製作し、彼らの紹介をしている。(岩手県奥州市(旧水沢市))
取 り 組 み 事 例 ⑩	<p>事例10：いわての文化情報大辞典（岩手県）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県民の多様な文化とのふれあいの確保と自主的な文化活動の展開のため、文化に関する情報をデータベースとして蓄積するとともに、行政機関や文化施設等を結ぶネットワークづくりを目的とした「文化情報提供システム」として構築。 ・平成11年度に実施した文化に関する県民意識調査結果や有識者の意見を元に、県民ニーズの高い情報や、本県独自の貴重な文化情報をデータベース化
取 り 組 み 事 例 ⑪	<p>事例11：報徳サミット（栃木県二宮町他）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二宮尊徳の「報徳思想」を通じて、まちづくりやひとづくりを考える場として、毎年二宮尊徳ゆかりの市町村で開催。 ・全国報徳研究市町村協議会（全国28市町村）により開催し、平成17年で11回目をむかえる。
取 り 組 み 事 例 ⑫	<p>事例12：地域プライドフォーラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史的地域プライドによる地域づくりの重要性を啓発するとともに、具体的な取り組みの紹介を行う。
取 り 組 み 事 例 ⑬	<p>事例13-1：宮沢賢治記念館（岩手県花巻市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・童話や農業技術研究などで知られる宮沢賢治を紹介する記念館では、賢治の生い立ち紹介や手書きの原稿などの展示のほか、ビデオや図書資料などで賢治の作品を紹介するなど賢治の思想が紹介されている。近接してイーハトーブ館や童話村などもあり、リピーターが多い。 ・また、宮沢賢治の命日である9月21日には、毎年賢治祭が行われ、賢治の詩の朗読や野外劇などが行なわれる。
	<p>事例13-2：かぐらグッズ（大分県庄内町）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・庄内神楽が盛んに行われている庄内町では、神楽をモチーフにした土鈴や壁掛けなどのグッズを製品化している。また、出前神楽（神楽の出張講演）や携帯神楽（神楽を携帯電話着信音に）などを行っている。
	<p>事例13-3：醬（ひしお）の郷（香川県小豆島）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古来の製法でつくる醤油を核として、油蔵を使った記念館、醤油造りの方法や歴史の体験学習、醤油ソフトクリーム、黒く色づいた醤油蔵のまち歩きを実現している。

(4) 提言

- ・ 「地域」とは、地理的な条件や気候的条件、いわゆる風土とそこに住む人々の資質や活動により成り立っているものである。しかし、近年、人の移動の高速化、広範化が進むとともに、情報交換手段の高度化が進み、「地域」という枠がなくなり、地域の空洞化が深刻化してきている。そのため、これまで地域で育まれてきた地域の誇りやコミュニティが希薄となり、さらなる空洞化が進むという悪循環に陥っている。
- ・ その打開策として、地域の独自性や創意工夫による地域づくりが進められているが、その際、重要なポイントとなるのは、地域がこれまでに守り受け継いできた歴史的地域プライドである。歴史的地域プライドを守り受け継ぐことにより、いわゆる地域に根ざした「文化資本」としての付加価値を生み出し、地域活力の再生へ活用することで、地域住民が住みよいわが町を誇りに思い、地域外からの交流人口を呼び込むことができる有効な手段であると言える。
- ・ 本節では、検討委員会や地域プライドフォーラムにおける意見をもとに、今後さらなる地域づくりに向けた提言を整理する。

●歴史的地域プライドによる地域づくりは、地域住民の「アクション」から始まる

- ・ 歴史的地域プライドは、あまりにも身近にあるためその重要性を認識していない場合も少なくないため、外部の人から発掘、再評価されることもある。ただし、その後については自分たちの地域は自分たちの手でつくるという意識が重要である。つまり、他人任せではなく、自分でできることは自分でやるといった内発的な地域づくりを進めることが最も重要である。行政としては、やる気のある人が力を発揮できる仕組みをつくることが求められている。

●歴史的地域プライドに配慮した市町村合併後の地域づくりへの支援

- ・ 地方分権の推進や効率的な行政サービスの提供に向け市町村合併が進められている。市町村合併することとなる旧市町村（または地域）においては、それぞれの風土、歴史・文化が育まれており、それぞれの歴史的地域プライドが存在してきていることが想定できる。
- ・ 市町村合併により複数の地域を1つに束ねた新市の建設方針等を策定することとなる。その際、新市建設の理念や将来像までも1つに束ねようとする、各地域の住民が共感・共有できないものになる可能性がある。一方、各地域のプライド等を尊重しすぎると新市としてのまとまりがないものとなる可能性もある。新市建設の理念や将来像を作成する際には各地域の歴史的地域プライドを再認識し、各地域の住民と十分な話し合いを行うことが必要である。
- ・ 合併により行政区域は変わるものの、住民意識にある歴史的地域プライド（地域固有の精神文化）は普遍のものであり、新市に移行してもこれまでと同様に歴史的地域プライドによる地域づくりを続けていくことが地域独自の個性ある人づくり・自立する地域づくりに不可欠である。新市において地域独自の取り組みが継続できるよう支援体制を構築することが求められている。

●地域づくりの人材育成支援（若者の育成）

- ・ 歴史的地域プライドによる地域づくりには、地元住民の「アクション」が大事であり、さらにはそれを継続することが必要である。
- ・ フリーターやニートと呼ばれる若者が増加しているが、若者は自分の居場所、地域における存在意義を模索しているとも考えられる。
- ・ そこで、若者が興味を持つよう社会の仕組み、取り組み支援を行うことが求められる。個人個人は対等な立場で、オープンな空間の下、自由な話し合いで民主的に物事を決め、さらには誰もが主役・リーダーになれるというシステムを構築することが重要である。これにより、若者にも上からの押し付けではなく、自分たちが自ら行動でき、達成感も得られる仕組みができる。

●地域づくりの人材育成支援（団塊の世代を動員）

- ・ 日本の高度成長を支えてきた団塊の世代が定年退職を向かえる時期に来ている。いわゆる「2007年問題」であるが、これらの人材を地域づくりに動員することができれば、地域住民による地域づくりが促進できる。
- ・ ただし、高度成長期を生き抜いてきたため、短期間に成果を挙げるといふ成果志向が強いと考えられる。歴史的地域プライドによる地域づくりは前述のように時間をかけながら進めることが有効であるため、あせらずゆっくりと時間を使うことに慣れることが必要である。